

すたこら逃げ出す。しかし化物もさるもの、うつかりその手には乗らん。

「逃げるなら逃げる、俺はこれから晩餐會の支度にかからなくちやならん——」
さつさと門に入つてしまつたので、折角の計略、向うからはづれて、見ん事、越中禪に終つたかたち。

悟浄も仕方がないからすこすこ陸に歸り、悟空にありし顛末を語つてゐるところへ、水中から落ちぶれた風をした老人が這ひ上つて、悟空の前にひさまづいた。

「私は以前この川の領主でしたが、昨年五月西海から化物が来て、無理々々黒水神府を奪ひ取られました。老年の私、力づくではかなひませんから、西海龍王のもとへ參つて訴へましたけれども、化物と叔父甥の仲なので正當な訴訟を取上げてくれません。齊天大聖様、どうかあなたの御力で、正義の裁判を受けるやうにして下さいませ。」

と、はらはら涙を流して、司法權確立のために助力を乞ふのです。

辯護士氣取りで、老人の訴へを聞いてゐた悟空、義憤を發して、

「そりや西海龍王がよくない。親戚だからつて、裁判に依怙最良をするのは、司法權を弄ぶもんだ。ようがす、俺が一つ龍王に談判して横領犯人を捕縛させ、ついでに縛を取つてあげやせう。」
すぐ雲に乗つて西海に至り、それから水除けの術を使い、波を押分けて進んで行くと、矢張り龍宮を志す者と覺しく、黒水神府の印絆纏を着た小使が、文箱片手に前方を走つて行くのを見つ

けた。

悟空追ひかけて行つて、如意棒でばかり撲り殺し、文箱を奪つて開けて見ると、中に「黒水河の甥より西海龍王様臺下」と上書きした一通の書面。

前略、今日はからずも唐國の僧三藏を生捕りに致し候については、叔父上様は御賞味願ひ上げ長壽の御祝ひ致したく、何とぞ速に御來臨を賜はらば幸甚之に過ぎず候

早々頓首

と、したためてあります。悟空はいい證據書類を手に入れたと北叟笑みながら、やがて龍宮におもむき、刺を通じて面會を求めました。

龍王は、悟空が昔、天上界を騒せた頃の蠻勇振りを知つてゐるから、何の用で來たのか知らんと、恐る恐る出迎へる。

「これは齊天大聖にはお珍しい、して何の御用でおいでになりましたな？」
「いや近所を通りかかつたので、一杯馳走にならうと、お寄りして見ただけさ——だが、酒の前にちよつと、この手紙を見てもらひませうか。」

充分凄味をきかして、内懐から出した手紙をひよいと押しやる。日本の芝居にするなら、くり尻をまくつて、あぐらを組んだ右足に左の手をかけ、横目でジロリ相手の顔を見上げようといふところ。龍王手紙を讀むうち胸に思ひ當ることがあるので、見る見る顔色が變り、びたり悟空の前に両手をついてあやまります。

「どうぞ御勘辨々々々——きやつは私の妹の子ですが、修行のため黒水河にやつて置きましたところ、とんだ悪いことを仕出かしました。早速人をやつて捕まへさせますから、どうか暫くお待ちになつて下さい。」

と悴の摩昂太子に精兵五百を授け、甥の召捕り方を命ずる。龍王が心から恐れ入つた様子を見て、悟空も深く追究することをやめ、太子とともに黒水河征伐の觀戰にと出かけました。

摩昂は自分だけ先きに行つて、面會を求めると、當の叔父でなく從兄が來たのを不審がりながら、化物が出て來た。

「叔父さんに三藏の肉を御馳走したいと思つて、お招きしたのに、どうして君がやつて來たんだい？ 何か都合でも悪いのか。」

「いやさうぢやない。その和尚様の弟子の孫悟空氏は偉い通力のある方だ。早く和尚様を返さないと、君はひどい目に逢はされるぞ。」

「ふん、君はいやに山猿の肩を持つね、僕はあんな奴はちつとも怖くはないよ。若しやつて來や

がつたら、取ツつかまへて和尚と一緒に食つちまはあ。」

「この命知らずめ、無禮なことをいふな。僕はお父さんの命令で貴様を捕縛に來たんだぞッ。」

「何をツ、この野郎！」

血氣の兩人、いきなり大格闘を始め、互に負けじと戦ふうち、化物は摩昂の三角棒でしたたか腰骨をたたかれ、たまらず地べたへぶつ倒れる。海兵等すかさず寄つてたかつて、後ろ手に縛り上げ、きりきり歩めと悟空の前に引据ゑた。

悟空今度は判事然と構へ込み、

「その方、叔父の命令にそむき、水神の領地をも強奪し、その上、俺の師匠や兄弟分をつかまへて、食はうとするなど數罪俱發だ。よつてその方を極刑に處す。」

と、はつたとばかり睨みつける。化物はその勢ひに吞まれて頓首百拜。

「私が悪う御座いました。ただ今すぐお二人を御返ししますから、どうぞ命だけはお助け下さ

501

額を地にすり付けてあやまります。

悟空が化物の裁判をしてゐる間に、悟淨は一刻も早く師匠を救ひ出まうと、案内知つたる水神とともに河底におもむき、三藏と八戒をつれて浮び出て來た。

八戒は化物が縛られてゐるのを見て急に強くなり、いきなり熊手を振上げてなぐらうとする。

悟空その手をおさへて、

「八戒、まあ待て！ 俺も此奴を死刑にしようと思つたが、それでは叔父さんの龍王に對してよくない——摩訶さん、此奴はあんたにお渡しするから、いいやうに處分して下さい。歸つたらお父さんに宜しく……」

さすがに義理も人情も知つてゐる扱ひ方。摩訶は旨を諒し、從弟を引立てて西海へ歸つて行く。一方水神は蓄領土を奪還してもらつたので、悟空に厚く恩を謝し、その返禮に法術を使つて上流をせき止めてくれたので、一行はやすやすと向う岸にたどり着くことを得ました。

和尚地獄車遲國

一 三仙人の惡逆

黒水河を後にまた西に向つて進むうち、早や多も過ぎて世はのどけき春となつた。師弟四人、四方の景色を眺めながら、愉快な旅を續けて行くと、遙か前方からエンサカホイ、エンサカホイと、大勢で苦しうに叫んでゐる聲が聞える。悟空何事ならんといふばかり、空に舞上つて見下せば、立派なお城の外に、何か大工事をすると思ひ、五六百人の和尚が、材木や土砂を積んだ車を、汗水流して引いたり押ししたりしてゐるのです。

しかし何故かう和尚だけを働かせてゐるのか、どうも分らん。そこで悟空は雲水の僧と變じ、馴れ馴れしく監督らしい男のそばに行つてわけを聞くと、監督は煙草をふかしながら、横柄な態度で語つて聞かせる。

「旅の和尚にや分るめえが、ここは車遲國といふところだよ。今から二十年前に、大旱があつた時、王様は今働いてる坊主どもに、雨降りの御祈禱をさせたが、奴等にや腕がないもんだから、一たらしも降らなかつたんだ。その時、俺たちの親分の虎力、鹿力、羊力といふ三人の仙人が來

て降らせたので、それからといふものは、坊主どもは亂離こつばい。寺はこはされる、寺領は取上げられる、それを皆三人に下さつたので、三人は坊主どもを土方に使ひ、お屋敷の新築にかかつてゐるのさ。どうだ、豪勢なもんぢやないか。」

和尙は和尙づれ。悟空この話を聞いて、心中大に和尙たちに同情し、何とかして助けてやらうと考へた。

「さうですか。私の伯父でやつぱり和尙なんですが、長年行方がわからないので捜してゐるんです。ひよつとしたらあの中にもゐるかも知れません。どうかお情ですから、捜さして下さいな。」

「よしよし、特別に許してやらう。」

悟空の調子がいいので、資本家側の監督はうまくだまされてしまひ、危険な指導者を労働者に會はせることを許した、仕すましたりと悟空は、監督の目の届かんところへ行つて、こそこそ和尙たちを煽動する。

「今聞けば、お前達は全く可哀さうなもんだ。それで一體どんな待遇を受けてゐるッ！」

「それや實にひどいんです。毎日十四五時間も労働をさせて、一度湯のやうな粥を食はせるばかり、夜はこの砂原にころ寝ですから、全くたまりません。」

「それはつらからう。そんならいつそ逃げ出したらいぢやないか。」

「ところがそれも駄目なんです。ここの仙人が、國王のお許しを受けて、私たちの繪姿を國中に

はり出し、一人つかまへた者には官吏なら昇級をさせるし、普通の人なら五十兩の褒美をやることになつてゐますから、一足だつて逃げ出せません。」

日本のいはゆる監獄部屋は、この頃あちらにもあつたと見えます。悟空はわざと腹を立てた風をして、更に油をかける。

「そんなに苦しけれや、一思ひに死ねばいいぢやないか。意氣地のない奴等だなあ。」

「全くです。現に仲間が二千人も居たのが八百人は自殺し、七百人は病死しました。しかし死ぬにも死に切れないわけがあります……」

と言葉をついで、そのわけを語り出した。

和尙の一人がいふところによると、かうである——。

久しい前、神様が夢枕に立つて告げたまふには、お前たちは苦しくとも、滅多に死なうなどと思ふな。そのうち唐の國から、孫悟空といふ荒法師が来て、悪い仙人を亡ぼし、再び佛の教へを國內に弘める時が来る。それまで我慢して待つてをれとあつたから、首を長くしてその人が来るのを待つてゐる——といふのです。

悟空は自分の名が出たので、あまり悪い氣持もしない。心中ほくそ笑んだが、そんな顔は表に見せず、一旦和尙達と別れて監督のそばに行つた。

「監督さん、行つて来ました。」

「どうだつたい、尋ねる伯父さんが見付かつたかね。」

「おましたとも、あの五百人が全部私の伯父です。どうか皆釋放して下さい。」

監督は、悟空が取りのぼせて気がかしくなつたのだと思ひ、呆れた顔をして、

「ハハハハ、お前は気がちがつたんだな。あの中の一人をゆるすのにだつて、親分のゆるしを得なくてはならないのに、どうしてそんなことが出来るもんか——まあ氣を落着けてからものをいへ。」

「なに、それぢやどうしても許さんといふのか。」

「うるさいな、氣ちがひ坊主——どうしたつて駄目だよ。」

「そんならかうだツ！」

言下に如意棒で監督の頭をボカリ、監督君うんともいはず、その場へばたり。

速くでこれを見た坊主どもは、驚いてそこへ駆け付けて来た。

「大變々々、あんたはとんだことをなさつた。仙人が怒つて私たちを卷添へに殺すかも知れませんから、早く自首して私たちを助けて下さい。」

「心配するな、俺はただの旅僧ではないぞ。まことは唐の三藏法師の一番弟子、齊天大聖孫悟空とはわがことなり、間近く寄つて面體拜み奉れ、えい。」

悟空、大氣取りで、歌舞伎役者みたいな見得を切つたが、薄ぎたない風をした旅僧を、誰もさうと信用するものがありません。

「冗談ぢやない、あんた見たいなきたない坊さんが、あの偉い孫悟空様なもんですか。」

「何を申す、お前たちは、まだ逢つたこともないくせに、どうして、悟空だか悟空でないかわかるんだ？」

「だつて夢枕に立つた神様が、悟空様は額が廣くて眼が鋭く、ひげつ面でもちよつと猿のやうだけれども、なかなか立派な男だと申されました。」

「ハハハハハ、ぢや本當の姿を見せてやらうか——」

とヒョイと身體をゆすぶつて、本相を現したので、一同あつと驚き、地にひれ伏して三拜九拜。「ひやーつ、これは間違ひなく孫悟空様だ——どうぞわれわれを哀れと思召して、この監獄部屋から救ひ出して下さいませ。」

「よし、よし——今お前たちに身の毛を一本づつやるから、これを握つてどつかに隠れてゐろ。若し役人がつかまへにでも來たら、こぶしを開いて俺の名前を呼べ。そしたらすぐ出かけて行つて、役人を追つ拂つてやる。」

全員に漏れなく毛を配給したが、一人が試みに手を開いて「悟空様」とやつて見ると、忽ち、もう一人の悟空が現れ、鐵棒を持つて突つ立つた姿は、勇氣凛々千軍萬馬も近づき難き風情。外

の連中も面白がつてこれをまね、彼方でも悟空様、此方でも悟空様と呼ぶや、一度に數百人の悟空が出現し、悟空と坊主でこね返すやうな混雑だ。

「おいおい、さう濫用しちや困る。皆手を握つて、元に戻してしまへ——それからおれが仙人を退治したら、すぐ方々へ掲示を出すから、その時は皆歸つて来て、毛を返すんだぞ、いいか。」
一同喜び勇んで、それぞれ毛を手に收め、荷車や畚は捨てつ放しにして、思ひ思ひに逃げ去りました。

二 木像に化けて

そこへ三藏等は、悟空の歸りが遅いのを心配して尋ねて来たので、これまでの顛末を物語つてみると、まだ残つてゐた十數名の和尚が来て、うやうやしく拜禮しました。

「私どもは城内の勅建智淵寺の和尚で御座いますが、國王の御先祖が建立された寺なので、まだこはされずにゐます。どうぞ今晚は私どもの寺にお泊り下さい。」

請するにまかせて一行はその寺におもむき、精進料理の馳走を受けた上、久しぶりに疊の上で樂々と眠りについた。

ところがその夜なかのこと、悟空がふと眼をさますと、はるか遠くの方で鐘や太鼓の音が聞える。ちやうど小便に起きたから、そのついでに音のする方へ飛んで行つて見ると、そこは悪仙人

の住んでゐる三清觀といふ寺院。虎力鹿力羊力の三人は數百人の弟子を従へ、祭壇には數多の供物をそなへ、護摩をたき、鐘太鼓を鳴らしながら禮拜してゐます。

悟空は急いで歸つて来て、三藏に悟られぬやう、小聲で八戒と悟浄を呼び起す。

「おい、起きろ起きろ。今三清觀に行つてのぞいて来たんだが、とてもうまさうな饅頭や大福や果物が山と供へてあつた。一つこつそり出かけて行つて、あれをせしめようぢやないか。」

廢坊の八戒も食ひ物のことを聞いたので元氣よくはね起き、三人で三清觀に飛んで行く。悟空は頃合ひの場所から、ふつと息を吹きかけると、忽ち一陣のなまぐさい風となり、殿内のともし火を悉く吹き消してしまつたので、滿堂戦々兢兢たる有様。虎力大仙は、首をかしげて考へてゐたが、

「この風はどうも面白くない風ぢや——今夜はこれでやめにして、明朝、またお祈りをすることにしよう。」

と、一同とともに引下つてしまふ。

その間違しと八戒は、飛び込みざま、大福をつかんで頬張りかけたが、悟空その手を取つて制止しました。

「八戒、まあ待て。あの祭壇の上にならちやうど木像が三つあるから、あの姿になり變つて、ゆつくりと頂戴に及ばうぢやないか。」

悟空先づ元始天尊の像に變ると、八戒は太上老君、悟淨は靈真道君になり、木像は庭先の池にどぶんどぶんと投げ込んだから、もう人が来ても見現される心配がない。壇上に坐り込んでむしやりむしやりやりはじめたが、八戒と悟淨の食ひ方の早いこと、さながら「烈風の殘雲をまくが如く」、悟空がまだいくつも食べないうちに、すつかり平らげてしまった。

この時一人の弟子が、壇の上に鈴を置き忘れて来たのを思ひ出し、瞬間の中を手探りでやつて来たが、腹一杯になつた木像がふうふう息をしてゐるの聞き付けたから驚いた。鈴を持つたまま慌てて逃げ出す拍子に、蕩子の核に滑つて仰向けにすてんどろ、同時に鈴が碎けてびしやんがらん、八戒たまりかねて、わつはつはははは。

弟子は八戒の笑ひ聲に益々驚き、こけつまるびつ走り出して、金切り聲。

「大變です大變です、誰か来て下さあい。本堂の木像が笑ひ出しましたッ！」

それは奇ツ怪事だといふので、三仙人は弟子達を呼び起し、手燭を持つて恐る恐る調べに来たが、悟空を初めかたくなつて身動きもせずゐるので、誰も贖物の木像とは氣付かない。

「何も別に變つたことはないやうぢやが……おやおやおやおや、誰かお供物をみんな食べてしまつたぞッ」

「ほんとに無くなつてゐる——はてな、これはかうではありますまいか、私どもが一心にお勤めしたので、天上から神様がお降りになり、供物を召し上つたんぢやないでせうか。」

「うん、或はさうかも知れない。ぢやまだここにいらつしやるだらうから、長命の藥水をいだけて王様に差上げ、われわれの手柄にしようではないか。」

「そうぢや、それがいい、それがいい。」

仙人等は相談一決、弟子どもに鐘太鼓をたたかせ、三人で手振り足振りしきりに踊る——

「長生き藥を恵みたまへ、天の神のみこと……」

仙人が一心不乱にお祈りするのを見て、壇上の八戒は小聲で悟空に話しかけます。

「兄貴、あのお供物は結構だつたが、お祈りには弱つたな。一體どうしたらいいだらう。」

「萬事おれにまかせて置けよ。今うまくごまかして、奴等をあつといふ目に會はせてやるから……」

そこで悟空は、勿態ぶつた作り聲。

「善きかな、善きかな。汝等かくも神をうやまひ尊ぶこと過分に思ふぞよ。さりながら今日は折悪しく、長命の藥水を忘れて参つた、いづれ日を改めて持つて来て遣はさう。」

何しろ木像が口を利き出したんだから、仙人はじめ一同の者は、本當に神様が天降つて来られたのだと思つて非常な喜びやう。この機會を逃しては、またと藥が手に入らぬと思つたから、床に頭をすりつけて一生懸命歎願します。

「よくいらして下さいました、お有難う御座います——お薬は少しでも宜しう御座いますから、どうぞお情を持ちましてお授け下され、我々の壽命を延ばして下さいませ。後日といはず、是非今日お願い申し上げます。」

「左様か、たつての願ひとあらば、特別に調合してやつても宜しいが、急拵らへのは味が悪いし、且つ子孫の命をちぢめるかも知れぬが、それでも差支へはないか。」

「宜しう御座りますとも、味や孫子のことなどはどうでも構ひません。どうぞ我々がかくまで神様を敬ふ心根を思ひやられて、薬水をお恵み下さい。」

「では拵らへて遣はさう、入れ物をこれへ持て！」

仙人は願ひがかなつたと大喜びで、うやうやしく壺や井や花瓶などを三人の前に持つて來たので、悟空はからくりを見られないやうに、人拂ひを命ずる。

「薬調合の間、汝等はすべて室の外に下つてをれ。若し少しでも覗いて見でもすると、眼がつぶれてしまふぞよ。」

一同を出して置いて、悟空は虎の皮の褌をまくり上げ、花瓶のなかに、しこたま小便を放射し、二人にも同じやうにやれと目くばせをする。悟浄は、しやがんでどんぶりの中にしたが、いたづらな八戒は、わざと遠くの方から彈道をつけて壺のなかに注ぎ込み、どうだい見當がうまいだらうといった顔。

「薬が出來たから、みな參れよ。」

悟空のいかめしい聲に、皆はお辭儀をしながらはいつて來て、有難さうに入れ物を持ち出し、一緒に集めて早速頂戴に取りかかる。

何分稀代の仙薬だからといふので、取つて置き、瑪瑙杯を取出させ、年上の虎力が先づ一杯ぐつとあふつたが、唇をすぼめ、鼻先に皺を寄せてとても變な顔をします。

「兄さん、どうです、味は？」

「酸っぱいやうでもあり、鹽辛いやうでもあり、實に奇妙な味だ。」

「どれどれ、いやこれはまづい、何だか熱臭いやうな味がする。」

「うん、少し小便臭いやうだ。お胸が悪い、べつべつ。」

鹿力、羊力も飲んで見て、いろいろと味の評定をしてゐるが、この味だけは賢明なる讀者諸君といへどもあまり御存じはあるまい。尤も筆者の知人で小便の味を知つてゐる人があるから、エピソードとして、ちよつと御紹介することを許していただく——。

三 小便の味は？

それはS氏R氏といふ有名な小説家と評論家。一夕二人はR氏の家で痛飲し、S氏は遂にその家に泊ることになつた。夜半S氏は尿意を催して起きたが、便所に行くにはR氏夫妻の寢所を通

るのが遠慮だし、屋外にやらうとしたけれども勝手知らぬ雨戸の音がどうしても聞かない。ふと室内にビールの空き瓶が三四本片付けずにあつたのを見つけたから、これ屈竟の尿器なんめりと、早速利用に及び、その後二三回起きた時も、總てビール瓶に注入して自分の名案に感服しながら、安氣な一夜を送りました。

翌朝遅く起きてから、酒飲みの方、この人たちがウエルカム・ワインと戲稱してゐた迎へ酒をやることになつた。しかし口がねばつので、先づビールをやらかさうと、R氏が女中にいひつけます。

「おい、初めにビールを持つて来い。」

女中は命に従つてビールを二三本持つて来ました。なにしろ、熱してゐる口に、ビールの清冽な刺戟はいいものです。S氏は、その快味を豫想しながら、グーツと一杯やると、なんだか世の常ならぬ味がする。

「R君、このビールはちと酸^すえてるんぢやないかね。」

「どれどれ。」

R君も自分についだコップを飲んで見たが、如何にも變な味だ。虎力大仙がしたやうに唇をすばめながら女中に聞く。

「おいこのビールはどうかしはしないか、味が變つてるやうだぜ。」

女中は平然として答へる。

「はい、昨晚、口をお抜きになつたばかりで、そのままになつてゐましたから、勿體ないと存じまして……」

果然！ R君はおのれに出でたものが、おのれに歸つたなと悟つたが、如何に親友の仲でも、

「俺の小便だ」と、その場でR君に明すわけには行かない。

「やつぱりビールはいかん、日本酒にしよう、日本酒にしよう。」

と素知らぬ顔で方針の變更を提議し、盛んに日本酒の杯^{コップ}を重ねました。

後日R君がこのことを明してあやまると、R君は案外平氣な顔で、

「ひどい目に會はせたな。しかしちよつと酸つばいなと思つたばかりだつたよ。」と、苦笑したきり。これをR君に聞けば「なあに腹を素通りしただけなもの、ビールと大差ないさ。」と自分の生産物だけに、さう悪い味だとは申しませんでした。

閑話休題、要するに尿の味は右のやうなものであるらしい。しかし悟察は早晩事の露顯すべきを察し、一同とともに木俵から本相に還元して大聲で呼ばはる。

「はははははは、それは薬ぢやない小便だよ。俺たちは神様でも何でもない天然に行く唐の和尚だ。今いろいろ御馳走になつたから、お禮に小便を進上したんだが、どうだ、おいしかつたらう。」

「ざまア見ろ、はははは。」

と八戒、悟淨も痛快がつて嘲笑したので、仙人等はだまされた口惜しさ、眞赤になつて怒り出し、箒や心張棒などで打つてかかる。三人は赤んべいしながら素早く雲に乗つて逃げ出し、智淵寺に歸つて三蔵に氣付かれぬやう、床にもぐり込んでぐうぐう寝てしまつた。

なんにも知らぬ三蔵は、翌朝三人を引き連れて王城をおとづれ、國王に逢つて旅行免狀の査照を頼んでゐるところへ、仙人の兄弟がやつて來た。悟空等は彼奴俺たちの小便を飲んだんだと可笑しくてしやうがないが、仙人は頗る倨傲尊大の態度で、三蔵師弟を横目に睨みながら、國王にたづねる。

「斯く早朝參内したのは、一大事をお知らせ申さうと思つてで御座るが、それは兎に角、あの四人の和尚はどこから參つた者ですか。」

「あれは唐の皇帝の命により、天竺へ行くとのことで、旅行免狀を見せに參つた者ぢやよ。」

「圖々しい奴どもだ——實は私も彼奴等のことを申し上げようと思つて參つたところぢやうど幸ひ、陛下には何も御存じあるまいが、彼奴等は城外で工事監督を打殺して、悉く坊主を逃がしてしまひ、その上、三清觀に忍び入つて木像をたたきこはし、小便を長命の妙藥などと稱して、われわれを愚弄致しました。早く彼奴等を縛つて重罪に處して下さい。」

國王はこれ聞いて大いに憤り、家來に命じて四人を縛らせようとするのを、悟空兩手をひろ

げてさへぎりながら叫びます。

「陛下、しばらく御心を落着けて私の申すことをお聞き下さい。私どもは昨日この國に參つたばかりで、工事場も三清觀とやらも知らう筈がありません。それがどうして、今あの仙人様のいはれたやうなことが出来るのですか——」

白ばくれて事實を否定したので、國王も決斷し兼ねてゐるところへ受付の役人が來て、早急で苦しんでゐる農民が門前に押しかけ、仙人にたのんで雨を降らせるやう歎願してゐる旨を取次いだ。國王心にうなづき三蔵等を顧みて、

「わしが僧侶を優遇しないのは、先年旱魃に雨を祈り得なかつたからぢや。今お前たちが仙人と法力を比べて、若し雨を降らしたなら罪を許してやらうと思ふが、それが出来るかどうぢや。」

悟空心中占めたと喜び、

「それは造作もないこと、早速勝負をさせて下さい。」

と引受ける。これから仙人對僧侶の術くらべが始まらうといふのです。

四 仙人と術競べ

そこで國王は家來に祭壇を掃除させ、自ら群臣と共に五鳳樓に上つて御見物になる。

虎力大仙はこの前の經驗があるから、當然大勝利を期しつつ、悠然として壇に登り、寶劍を取

上げて何やら呪文を唱へると見るや、たちまち西の空が曇つてそろそろ風が吹き出して來ます。これを見た悟空は、一本の毛を抜いて身代りをこしらへ、急いで空に昇つて見ますと、風の神が推雲童子をつれて、急いでこつちへやつて來るのに出會つた。

「おいおい、お前たちはどこに行くんだ。俺の師匠様が今日仙人と賭をしてゐるんだが、若しお師匠様の方を助けないと、この棒でたたき殺してしまふぞ。」

何しろ天界では昔から悟空の顔が賣れてゐるから、皆こはがつていふことを聞きます。仙人は風と雲がちよつと來さうになつたきり、そのまま停頓したのを見て業を煮やし、髪振り亂しながら懸命になつて次の呪文を念ずると、今度は雷公と四海龍王がやつて來たが、悟空又も通せん坊。「コラ、あんな詐欺師を助けに行く奴があるもんか。それよりこの次は俺の番になるから、一緒に俺の方にすけてくれ。第一番にこの棒をさし上げて合圖をしたら風、それから雲、雷、雨の順序でうんと馬力をかけてくれる。いいか、若し違つたらひどい目に逢はせるぞッ。」

神々は委細かしまつたので、悟空安心して雲を下りて見ると、虎力は遠雷の聲のみで、その後には小雨も來る様子がないのに、ますますのばせ上り、氣狂ひのやうになつて滅茶苦茶に御祈禱をやつてゐます。

「先生々々、いくらお祈りをして一向ききめがありませんね。一體どうしたんです、なんなら私が代りませうか。」

悟空に嘲弄されて、虎力は、すごすご壇を下り、面目なげに國王の前に戻つて來る。國王も不審顔で、

「今日はどうなすつた。何か天界に都合でもあるんですか。」

「いやなに、雨の神がどつかへ旅行して留守なさうで……」

虎力が冷や汗をふきふき、いい加減なことをいつてごまかさうとするのを、下で聞いてゐた悟空。

「陛下、虎力さんのいふことはみんな嘘です。雨の神でも風の神でも、みんなうちにあるんですが、術が足りないからやつて來ないのです。私の師匠が祈ればきつと來るに相違ありません。」

「左様か、では早く壇に上つて三藏に雨を祈るやうに申せ。」

三藏はもとより雨を降らせる法なんか知らないので、心配しながら悟空にささやく。

「お前いい加減なことをいつて困るぢやないか。わしは何んにも知らんのに……」

「和尚様、大丈夫ですよ。あなたは鬼に角あすこに行つて、出たら目なお經を讀んでいらつしやい、後は私がうまくやりますから。」

三藏は悟空のことだから何とかしてくれらうと思ひ、壇上に坐り、ナムカラタンノー、トラヤアアかなんかをやつてゐると、悟空は先刻打合せてある通り、何喰はぬ顔で如意棒をさし上げる。すると忽ち砂を飛ばすやうな烈風が吹き出し、次で順々に合圖通り雲、雷、雨とすさまじ

い勢ひで活動をはじめ、天地晦冥、近年未曾有の大シケとなつて、降りつづけること約五時間、氣象臺の藤原博士が目をまはすやうな大暴風雨。

農民の清悦は勿論、國王もすつかり感に入り、糞過ぎになつて、もう充分だらうとの仰せがあつたので、悟空最後の合圖をみると、さしもの風雨も一度に止つて、忘れたやうに太陽が輝き出した。

三藏の大功に、仙人の申告などはもう問題ぢやない。智淵寺を引拂はせて宮中に招じ、國王は群臣とともにいろいろもてなしましたが、仙人の方ではこれを見るにつけても、癪にさはつてたまらない。何がな報復の手段をと相談した末、三藏師弟が出立といふ時に國王に向つて、

「滅多に旅行免状をお渡しになつてはいけません、陛下に一言申し上げたいことがありますから……」

と遮りとどめました。

仙人兄弟が國王に乞うて、三藏等の出立を遮り止めたのは次のやうな魂膽でした——私どもはこの國に来て二十年も政道をお助けしてゐる、今回あの和尚のために雨降りの賭けでは負かされたけれども、ただ一番の勝負で私等の申告を退け、彼等の大罪を赦すといふのは輕忽に失しませう、どうぞもう一度技倆を比べさせて下さい——といふのです。

國王も、もともと信用してゐる仙人のいふことですから、すぐ動かされて同意を表した。

「では暫く旅行免状を渡さんことにませう、が今度は一體どんな賭けを申し込むのですか。」

「坐禪比べをして、あいつをヒシいでやらうと思ふんです。」

「坐禪？ それはおよしなさい。あの和尚は坐禪が商賣なんだから、とてもかなひませんぞ。」

「イヤ、私のやらうといふのは雲梯の坐禪と稱へ、五十脚のテーブルを積んだ上で、どつちが長く坐つてゐるかを勝負するのです。これなら決して負けはしませんから、御心配なさいませぬ。」

自信ありげな虎力の言に、國王は安心して三藏にたづねる。

「虎力大仙が雲梯坐禪を比べたいといつてゐるが、どうぢやな。」

三藏が返事を躊躇してゐるのを見て、悟空横合から引取り、

「師匠は雲梯でも何でもお引受すると申してゐます——和尚様、私が付いてゐるから大丈夫ですよ。」

と後の半分は三藏に小聲。

そこで國王は庭先へ、テーブルの禪臺を二通り積み上げさせる。虎力は、今度こそといった顔で、雲に跨がりてつべんに坐り込んだので、悟空は八戒と悟浄を雲に化けさせ、三藏を一方の臺に引上げて、左右から支へてゐるやうにした。これなら決して落ちつことはない。

虎力も得意の藝だけ、さすがにちつと坐つたまま動かないでゐます。悟空は暫くこれを見てゐ

たが、やがて頃合ひを見はからひ、蛇へびになつて虎力のところへ飛んで行き、いきなり鼻の穴へはいつたからたまらん。ハクションと大きくしやみをした拍子に、眞逆様に地べたへ落つこち、ウーンと氣絶したので、殿中は水よ薬よと大した騒ぎ。

鹿力大仙は、兄の虎力が再度の大失敗にくやしくてならない。

「陛下、兄はこの間から風邪かぜを引いてゐたので、ついあんな不覺をとつたのです。だから、まだ彼奴等を放免になつてはいけません。今度は私が『箱の中の物當て』で、きつと彼奴を負かしてやります。」

水藝みづげいでも輕業かろげいでもかなはなかつたので、今度は手品の腕比べで負かさうといふ策略。國王もこれに同じて、女官にいひつけ、誰にも知れぬやう長持の中に物を入れて、三藏と鹿力の前に持つて來させ、中の物をあてるやうに命じた。

悟空この時南京蟲に變り、木の割目から長持の中に這ひ込んで見ると、國王の着る立派な衣裳が入つてゐた。悟空はこれを散々に裂きちぎり、唾つばや鼻汁はなぢをひつかけて薄ぎたないポロ切れにした上、歸つて三藏の耳にとまり、斯く斯くと告げたから間違ひつこなしです。

「では鹿力大仙、私から先きにあてて見ませう。察するところこれはきたないぼろの類と存じます。」

「ばかなことをいひなさい。私の見るところでは、中の品はかたじけなくも、國王の御衣裳に違

ひは御座らん。」

國王はじめ一同も宮中にポロ切れがあらうとは思はないから、今度こそ正しく鹿力の勝と信じて開けて見ると、こはそも如何に、手も付けられんやうなきたないオンポロ。鹿力の面目おもて玉たまはもとより、國王も顔かほをしかめて、

「誰がこんなきたない物を入れて置いて、わしに恥をかかせたのぢや。」
と大した不機嫌ふきげんです。

羊力大仙やうりきだいせんは先刻さきしやくから兄貴達あにいぢが續け様に失敗したのを見て考へた。あの和尚はきつと物を入れ換へる術を知つてゐて、巧みに前まへに入れた品を換へるのらしいが、人間を入れて置いたなら、よもやこれをすり換へることは出來まい。これであいつの術を破つてやらうと、今度は長持に給仕のポリーイを入れて、三藏の前に持ち出させました。

だんだん手品がむづかしくなつて來るので、後見役の悟空は天手古舞てんてこまです。

五 首斬られ競争

悟空はまた南京蟲になつて、長持の中に潜入して見ると、給仕のポリーイがチョコナンとらづくまつてゐたので、早速羊力大仙の姿と變り、おこそかな聲でいひ付ける。

「長持の外でお前を給仕と呼ぶ者があるかも知れないが、決して返事を致すなよ。今頭を刺つて

やるから、小僧と呼ばれたら、念佛を唱へながら出て来い。いいか、うまくやつたら褒美をやるぞ。」

「畏まりました。大仙様がお勝になるなら、どんなことでも致します。」

寶物の仙人とは氣が付かんから、唯々諾々、何でも命令どほり。悟空は如意棒を剃刀に變じ、綺麗な、くりくり坊主に剃つてやり、毛を抜いてこしらへた法衣と木魚を置いて、三蔵の耳たぶへ歸つて来た。

羊力は三蔵が先刻から首をひねつてゐるのを見て、威猛高になつて詰め寄る。

「さあ、今度のをあてて見る。俺は確にボーイが入つてゐると思ふが、汝の考へはどうぢや？」

「暫くお待ち下さい、今考へ中ですから——うん小僧だと、よしよし——いやなに私の考へでは佛家につかへる小僧だと存じます。」

八戒は先刻から師匠の成功續きに、覺えず調子に乗つて口上役。

「やり損じの儀は幾重にも御容赦、首尾よく當りましたら、お手拍子喝采を願ひます——ハイこの通り。」

長持の蓋を開けて見ると、正しく圓頂法衣の小坊主。木魚をボクボクたたきながら、なんまいだよ、なんまいだよといつて出て来たので、案に相違の仙人は、あつ氣にとられて開いた口もふさがりません。

國王もすつかり感心して、もう旅行免狀を渡してやらうとしたが、この時傷の療治を済ました虎力は、纏帯のまま出て来て、またも國王を遮りました。

「まあお待ちなさい。私にはまだ首を斬つて、元の通りつき合せるといふ、取つて置きの藝がありませんから、これが手合せを致したう御座る。」

くやしがつて執物く術比べの追加を追つて来るが、神通力の悟空は、屈とも思はない。

「そんなことならお茶の子さいさいだ。今度は俺が師匠に代つて出るから、誰か早く俺の首を斬つてくれ。」

役人は國王の命により、悟空の後へ廻つて、エイヤツといふ懸け聲共首打ち落したが、その斬口からは血一滴こぼれない。しかも首のない胴體がふらふらと立上つて、

「踊り踊るなら品よく踊れ……」

とか何とか、腹の中から聲を出してうたひながら、手振足振面白く盆踊りをはじめ。やがて自分で落つこつてゐる首を拾ひ上げて、ひよいと斬り口に乘つけると、傷あともなくつき合はさつて舊態依然たる孫悟空。

「さあ虎力君、今度は君の番だよ——首斬りや御願に、お次ぎの番だよ。」

ふざけた奴で、だんだん言葉までぞんざいになつて来る。

虎力も心得たりと首差延べて斬つてもらつたが、これも同じく血が流れ出す、暫くしてから元

に歸つてつき合はさうとする。かくと見た悟空素早く大鷲に身を變じ、首をくはへて御水河の上
に飛んで行き、どぶんと淵へ落したから、虎力は腹の中でいくら「首、首」と呼んでも歸つて來
つことがない。たうとう斬り口から血が溢れ出て死んだのを見ると、一疋の大きな虎です。

これを見た一同、顔色を失つて騒ぎ立てる中で、鹿力はわざと平氣に構へて奏上する。

「兄は死んだつて虎になるわけはありません。きつとあの和尚が魔法を使つたのに相違がないか
ら、一つ私は切腹の賭けをして、彼奴を降参させてやります。」

と申し込んだが、もとより悟空の敵ぢやない。鹿力が腹をさいて五臟六腑を取出した際、鷲に
變つて食ひ散らしたので、これも鹿の本性を現し、そのまま往生を遂げてしまひました。
残る羊力、さて何をするか？

兄貴兩人が惨敗して死んでしまつたんだから、もう大概参つてしまひさうなもんだが、残念無
念で目が眩んだ羊力は、なほ懲りずに今度は釜煎りの賭けを申し込みました。

悟空は先年、太上老君が黒燒に使ふ八卦爐に入つてさへ、平氣だつたんだから、釜煎りぐらゐ
は何とも思はない。庭先に持つて來た大釜の油が、くたくた煮立つた頃を見はからひ、すツ裸に
なつて釜の中に飛び込む。

「おお、いい氣持だ——番頭さん、もつと熱くしておくれ。」

平氣でぼちやぼちやつてゐるので、朝廷の人々は勿論、八戒と悟淨も感嘆おく能はずの態。

「實に大したもんだ、これ程の藝があらうとは思はなかつたよ。」

などとささやき合つてゐる。悟空釜の中からこれを見て、八戒が何かあざ笑つてゐるのだらう
と疑ひ、おどかしのため急に釜の底に沈み、棗の種に變つて、それつきり浮き上つて來ません。

羊力はこれを見て、たうとう悟空が参つたなと喜び、國王に奏して今度は八戒を煮ようとした
から大狼狽、シタバタあばれながら泣き騒ぐ。

「いやだいやだ、俺は豚カツにされるのはいやだ——あの猿、つまらぬ賭けをしやがつて、おれ
まで冥土の道づれにしようといふのか。」

悟空は釜の底でジーツとして聞いてゐたが、八戒がもう少しで投込まれようとした時、ひよつ
くり浮出して八戒をだき止め、釜の外へをどり出た。

「見つともない、泣くな——さあ羊力、俺に代つて一風呂浴びて來い。」

羊力も無論釜煎りの術を承知してゐるから、直ぐ飛込んで氣持よささうに汗を流してゐる。し
かし蛇の道は蛇で、悟空は奴が冷龍の助けを受けてゐるのだと察し、呪文を唱へ冷龍を追つ拂つ
たからたまりません。羊力は釜の中で四苦八苦、遂に羊の本體を現し、コンガリとうまさうなマ
ツトン・カツレッツに揚がつたまま死んでしまひました。

國王は初めて自分の不明を覺り、佛法を滅さうとした罪を悔悟したので、悟空は國王に奏して

「僧侶救免」の指示を辻々に出させる。今まで隠れてゐた和尚たち大喜びで、王城の前に集まり「齊天大聖萬歳」「孫悟空閣下萬歳」の聲は天地を揺がすばかり。悟空はパルコニーに出て一場の挨拶を試み、先きに貸し與へた毛を身に納め、なほ國王には深く將來をさとして、感謝の歡聲に送られつつ、車運國を出發しました。

通天河の主

一 小兒を犠牲に

行くほどに夏も過ぎて早や秋の初め。一日日暮てから月光をたよりに宿を尋ねてゐる中、はからずも一條の大河に行當つた。悟空筋斗雲に乗り、河の幅幾何かを眺めて見るに「洋々として月光を渡し、浩々とした影天に浮ぶ……岸口漁火なく、沙頭鷺眠るあり、茫々乎として海の如く、一望更に遶なし」と形容してあるほどの廣さ。げにやその岸に「通天河——幅八百里、古來行人稀なり」と標識してあることわりです。

悟空は歸つて來て長大息。

「和尚様、實に驚いた大川です。私の眼は日中なら八千里、夜でも五百里は見えますが、この川だけは全く見通しが付きません。」

「それは困つたことぢや。千辛萬苦を経て漸くここまでたどりついたのに、今またこんな大きな川に逢うでは、容易に渡る手段もない。これは何としたらよからうの。」

三蔵の歎息に、弟子達もまた頭を垂れて途方にくれてゐると、どこでか佛事を齎んでゐると覺

しく、かすかに木魚の響きが聞こえる。

八戒は一番先きに聞き付けて、

「あの音は人家のある證據です。河を渡る相談は明日のことにして、兎に角あそこへ行つて泊めてもらはうぢやありませんか、私は腹がすいてとてもたまらない……」

一同もこれに同じて、その家をさがして行きますと、果して門外に長旗を立て、燵々と燈火をつけて、佛事を行つてゐる家がある。三藏眞つ先に立つて案内を乞ふと、門前に出て來た老翁、人相の悪い三人の弟子を見るや、

「化物が來た！ 大變だ大變だ。」

と叫んで、あたふた奥へ逃げ込もうとしました。

暗闇からひよつくり猿と豚と禿げ入道に出られちや、誰だつてびつくりしませう。主人の老翁が化物だと思つて逃げ入らうとしたのを、三藏袖を押へて引止めました。

「御心配なさいませぬ。あれは化物ぢやありません、皆私の弟子です。」

「そ、さうですか——あなたは大層綺麗な和尚さんなのに、どうしてあんな見つともないお弟子ばかり、連れておいでなんですか？」

「いや、顔こそ醜うございますが、皆神通力を持つてゐてどんな怪物にでも負けません。ですから唐の國から五萬四千里を、無事にここまで來ることが出來たのです。」

老翁もどうやら安心して四人を奥に引入れ、集まつてゐた僧侶や縁者にわけを話して、四人を引合せた。

三藏つらつらこの家の様子を見るに、人々の顔は、みな打ち濕つて、ただことならぬ佛事のやうです。

「御主人に伺ひますが、今日は何の御法事をなさつておいでなのですか。」

「はい、實は別に人が死んだわけではありませんが、前以て、子供等の法事をしてゐるので御座います。」

「前以てお子供衆の法事とは、一體どういふわけですか。」

問はれて老翁、涙ながらに物語るには——。

元來この村には靈感大王といふ氏神があるが、此奴不良の神で、年々男女の童兒を人身御供にしないと、雨を降らせて五穀を稔らしてくれない。今年はやうどこの家が輪番に當り、主人陳澄、陳清兄弟の末子で、一秒金といふ八つになる女の子と、陳關保といふ七歳の男の子を、しかも今夜犠牲に持つて行くことになつてゐるので、一村のためとはいひながら、恩愛別離の情に堪へかねて、斯くは佛事を營み後生を祈つてゐるのだ——といふのです。

これを聞いた三藏はもとより、醜男の三人も父翁の胸中を思ひやり、同情の涙潜々たるものが

あります。悟空は義憤を起して、胸中に一思案。

「怪しからん野郎だ——ようがす、私がなんとかして上げませう。兎に角一週子供たちを見せて下さい。」

陳澄兄弟は何のことか分からないけれども、悟空のいふ通りに別室から一秒金と陳關係をつれて来た。頭はない二人は今に殺される身とも知らず、可愛い手で仲よく綾取りをして遊んでゐるさま、一しほ一同の涙を誘ひます。

悟空つくづく關係の姿を見てゐたが、ちよいと身體をゆすぶると、忽ち同じ形となつて、いづれを真蒲杜若、全く見分けが付かないやうになつた。父の陳清きよろきよろ眼。

「もしもしお弟子さん、何故そんな真似をなさるんです。どうか早く本相に還つて下さい。」

「どうでした？ 坊つちやんに似てゐましたか。」

「似てゐるところか、親の私でさへ迷つたくらいです……」

「ちや私が坊つちやんの代理になつて、人身御供に行つてあげませう。」

陳清大喜びで、そのお禮には三藏法師へ一千兩の路用を差上げるから、是非ともさうしてくれとたのむ。兄の陳澄はこの問答を聞きながら、柱によりかかつて、たださめさめと泣いてゐるので、悟空はそばに進み寄り、

「あなたも御心配なさるな。あの昏の厚い男をお嬢ちやんの身代りにして、二人の命を救つて上げますから……おい八戒、お前はお嬢ちやんの代りになつておあげ。」

「いやだよ、いやだよ。兄貴は兎も角、俺は人の身代りに食はれるのは嫌ひだよ。」

「なにお前だつて三十六種の變化を知つてゐるぢやないか。さあそんなことをいはずに、ちよつと姿を變へて御覽。」

悟空の後について、三藏も一緒にすすめるので、八戒も仕方なく呪文を唱へ、何遍も首を振つて漸く女の子の形にはなりましたが、柄が大きい上、頗る不細工なお嬢さんで、とても問題になりません。

二 夜陰に神祠へ

八戒が變化した姿は、まるで女相撲の關取みたい。悟空はふき出しさうになつたのをこらへて、「不器用な奴だな。これぢや駄目だ、もう一度やり直して見ろ。」

「斯うかい——まだ駄目かい。」

首を振つたり、手足を動かしたり、いろいろやつて見るが、どうしても子供のやうにならない。と汗をふきふきやめようとするので、面倒くさくなつた悟空は、いきなり背中をどやしつけ、

ふうつと息をふつかける。八戒驚いてはつとした拍子に、今度は立派な一秒金の姿となりました。「さあ御主人は嬢ちゃん坊つちやんを、どつかへ隠して置いて下さい。それからですね、私たちはどういふ風にして、靈感大王のところへ行きやいいんですか。」

「左様で御座いますな、ではあなたの方にこのお盆に乗っていただいて、すぐこれからお社へかっいで参ると致しませう。」

「さうですか——善は急げだ、さあ八戒行かう。」

こはがる八戒をなだめすかして、二人は朱塗の大きな盆の上に乗ると、村人は松明をともし、銅鑼や太鼓を鳴らしながら、鎮守の森へとかついで行く。

やがて二人を社の前に持つて来るや、村人は地べたに頭をすりつけて、一齊に禮拜します。

「大王様、毎年の例により子供を二人献上しますから、どうぞ充分に召し上つて下さい。さうしてどうか、作物がよく出来ますやうになすつて下さいませ。」

祈つてしまふと、一同後をも見ずに歸つて行つたので、残るは悟空八戒のただ二人。生ひ茂つた杉の木の前で鳴く鳥の聲は聲なきより更に淋しく、燈火消えんとしてはまた燃え、その物凄さたとへやうありません。

「兄貴、俺はこんな淋しいところにゐるのは厭だなあ。早く歸らうぢやないか。」

「馬鹿いへ、身代りに来た者が歸つてどうする。俺がついてるから心配せずに、温順しくしてを

れ。」

二人が小聲で話してゐるところへ、すうつと吹いて来たなまぐさい風とともに、ひとりの化物がやつて来た。見ればびかびか光る大眼玉、口は鰐よりも深くさけて劍のやうな牙がたらなり、全身鐵の如き鱗でおほはれた恐ろしい怪物。

「こらお前たちの名は何といふぞ。」

「はい私は陳關保でこの女の子は従妹の一秒金でございます。どうか御遠慮なく召し上つて、お米がよく取れるやうにして下さいませ。」

悟空の保が、平氣でづかづか返答するので化物は考へた——いつもの子供は俺の姿を見たばかりで、失神して死人のやうになつてしまふのに、今年のは、實に大膽不敵、ちと氣味が悪いから、だまつてゐる女の子の方を先きに食つてやらう——。

「これまでは男の子を先きに食つたが、今年は女から食ふとしようか。」

化物のつぶやくのを聞いた八戒は大狼狽。

「大王様、私は瘦せてゐてうまくないんです。前例に従つて男の子から先きに食べて下さい。どうか前例通り……」

前例々々と日本の議員みたいに前例を振り廻す。化物は耳にもかけず大口を開いてつかみ食はうとしたので、八戒絶體絶命。急に本相をあらはし、熊手を振り上げて化物の背中をびしやり！

可愛い女の子が豚のやうな顔の大男に變つて、打ちかかつたんだから化物も驚きました。きやつと叫んで空中に一目散——

悟空も仕方がないから本身に遭つて、八戒を叱りつける。

「この阿呆、折角の化物を逃がしてしまつたぢやないか。俺が息の根を止めてやらうと思つてゐたのに……」

「だつて黙つてゐると食はれてしまふんだもの……しかし、俺になぐられて、この通り鱗を落して行つたよ。」

二人でその邊に落ち散つてゐるうろこを見てゐる時、はるか空中で化物の叫び聲が聞えます。

悟空と八戒は、その聲を目あてに、空中に追つかけて行つて見ると、化物は雲の間から顔を出して聲をかける。

「やい貴様等はどこの坊主だ？ 何で俺の仕事の邪魔をする。」

「何だ、俺を知らんのか、さては貴様はもぐりだな。われこそは天蓬元帅猪鬃鬃、字名は悟能、法名は八戒、大唐の三蔵法師を守護して天竺へおもむく勇士なり。一緒にをるのは孫悟空といふ兄弟分だ。」

先刻まで慄へてゐた八戒、急に氣が強くなつて自分のことを長たらしく名乗りあげ、悟空はほ

んの刺身のつまだけ、ちよつぱり紹介したが、化物は悟空の名を聞くや、慌てて通天河に飛び込み、姿を隠してしまつた。

「どうだい兄貴、俺の名を聞いたら、恐れて隠れてしまひやがつた。」

「ふふう、まあそれはどつちでもいいが、川の中に逃げ込まれたのには弱つたな。」

「兎に角萬事は明日のことにして、今晚は歸つてやすまうや。俺はあの社に行つてお供物を持つて來らあ。」

抜け目のない奴で、神前に捧げてあつた羊、豚、菓子、果物などのそなへ物を取りあげ、悟空をせき立てて陳家へ歸ると、一同は話を聞いて大喜び。何しろ命の親だといふので、いろいろと御馳走した上、最上等の蒲團を出して四人をやすませました。

一行は久しぶりに柔かい蒲團の上に、手足をのばして寝ましたが、明け方近くになると、急に寒さがきびしくなつてとても寝てはをられません。さすがに寝坊の八戒まで目をさまして起きて見ると、これはも如何に時はまだ初秋だといふのに、戸外は非常な大雪で、既に二尺餘りも積つてゐます。

一同驚き呆れてゐるところへ、陳澄兄弟はかんかん火を起した火鉢や、あつたかさうな御馳走を持つてやつて來た。

「和尚様、お早う御座います。どうも時候はづれの雪が降りましてさぞお寒かつたで御座いませ

う。さあどうか召し上つて下さいまし。」

「全くこの雪には驚きました。この邊ではいつも今頃雪が降るんですか。」

「いいえ、こんなことは全く初めてで、私も不思議に思つてゐるので御座います。」

「さうですか——はからぬ御縁で昨晩はお宿をいただきましたから、今日は船をお借りして、この川を渡らうと思つてゐましたのに、この大雪ではとても渡れさうにない。ああ何時になつたら目さす天竺へ行き着けることやら……」

「さう御心配なさいませぬ。雪がやんで氷さへ解けたなら、何としてでも川を渡して上げますから、何日でも御逗留なすつて下さい。」

三藏の歎息を聞いて、陳澄兄弟はいろいろと慰めます。

三 雪降りとは計略

仕方がないからその日は一日滞在して、翌朝はどうかと起き出でて見ると、前日にも勝る雪降り。しかも川がすつかり凍つたと見えて、澤山の人が氷の上を往來してゐる。三藏は主人に向つて、

「あの人たちはどこに通ふのですか。」

「あれは向う岸の西梁國へ商賣に參るのです。こつちで一圓するものを、向うに持つて行けば、

五圓にも十圓にも賣れますので、命がけで出かけて行くので御座います。」

「それはえらい勇氣ぢや——あの人たちが、命を的に金儲けに行くのも、わしが勅命をなし遂げて、忠義を全うしようとするのも、つまりは同じことぢや。よし、これから氷を渡つて川を越えろとしよう。」

悟淨や陳氏は、大事をとつてしきりに諫止しようとするが、三藏の決意は半平として動きませ

ん。すぐに荷物を取りまとめ、名残を借しまれつつ同家を出立しました。

三藏は馬上、三人の弟子はその前後を警護して、飢ゆれば乾飯、渴すれば雪をかみながら氷の上を進むほどに、その日もくれて早や夜となつた。しかし宿る家もあらう筈はないから、月光を頼りに更に進んで行くを、たちまち足もとの氷がみりみりと音してさけ出し、悟空だけは素早く空中に舞ひ上つたが、三人は馬もろとも川の中に吸ひ込まれてしまひました。

前日來の時ならぬ降雪も、通天河の氷結も、皆靈感大王の仕業で、悟空にはかられて陳家の子供を食ひそこねた復讐に、三藏を取つて食はうといふ計略だつたのです。

水に落つこつた八戒と悟淨は、それでも三藏法師を救はうと捜しましたが、水中の化物が逸早くさらつて行つてしまつたので、どうしても見つからない。唇を紫色にしてぶるぶる慄へながら浮き出て來ると、空中にゐた悟空は心配して聞きます。

「お師匠様はどうなすつた？」

「それがいくら捜してもわからぬんだ。仕方がないから一旦岸に歸つて、何とか相談することしよう——お寒い寒さ。」

「何しろ二人はぶぶぬれだし、それにいい加減腹もすいてゐるので、今ここでどうするわけにも行かない。宜しく馳備をととのへて三蔵奪回をはからうと、馬をひいて陳家へ引返して來ると、主人兄弟は遭難の話聞いて心からなげき悲しみます。」

「だから私等がいはんことぢやない。氷が解けてから船でお送りしようと、あれほど申し上げたのに、意地を張つて、お出かけになつたから、こんなことになつたんだ。ほんたうにお可哀さうに……」

「さうおなげきなさるな。これはあの靈感の杜業に相違ありませんから、私たちが彼奴を退治して、きつと師匠を救ひ出し、そしてこの村のわざはひを取のぞいてあげます。」

悟空の自信ありげな言葉に、主翁も力をつけられ、濡れた着物を乾かしたり、また温かい御飯などをたいしてくれたので、三人は大いに食つて腹をこしらへた上、勇んで化物征伐に出かける。

悟空は元來水が不得手だから、毛虱に變じて八戒の耳の中に吸ひつき、二人は水を切つて進んで行くうち、「水籠之氣」といふ大類をかかけた立派な屋敷の前に出た。

「ここが化物の住み家らしい。見費どうしよう、われわれ二人で先づ戦をおつ始めようか。」

「待て待て、門の中に水があるかどうか見てくれ。」

「いや、中にはちつとも水がないよ。」

「ぢや俺が中に入つて様子をさぐつて來るから、お前たちは暫くここに隠れてゐろ。」

八戒の耳から飛び出した悟空は、身體を一振りして足の長い蝦に變り、門内に入つて見ると、化物は大威張りで正面に坐り、左右に居列んだ群臣と、つかまへた和尚を焼いて食はうか、煮て食はうかといふ御前會議を開いてゐるところです。悟空は廊下で立ち働いてゐる、女中頭の年とつた蝦のそばへ行つて聞く。

「今、和尚を食ふ御相談中のやうでございますが、その和尚といふのは何處にをりますんで。」

「お前さんそれを知らないのかい。それはね、昨日、王様がつかまへていらしつて、奥座敷の石の箱へ入れてあるんだよ。何でもその肉は若返りのお薬になるとかいふ話だから、わたいもお餘りの臍物でも頂戴して、一つ若くならうと思つてゐるのさ。」

この婆あお喋舌りと見えて、餘計なことまでべらべら喋舌つて聞かせる。悟空は、何食はぬ顔で、氣づかれぬやうに奥座敷に行つて見ると、果して石の箱があつて、中でしくしく三蔵の泣いてゐる聲が聞えます。

「お師匠様、悟空で御座います。私が參つた以上は、きつとお救ひしますから、お泣きなさいますな。」

「おお悟空か、よく来てくれた。早く何とかして救ひ出してくれ。」

「宜しう御座います。もうちつとばかり、我慢してお待ちになつて下さい。」

急いで門外に歸り、八戒悟浄に報告して、化物退治の作戦を授ける。

「和尚様は石の窟の中に監禁されてゐなされる。俺はこれから水の上に出て待つてゐるから、お前たちは化物に戦をしかけて、おびき出してくれ。」

自分は本身に變り、避水の術で水をくぐり抜け、岸にをどり出た。

八戒悟浄は今度もさそひ出しの役、例によつて門の扉をがた叩きながら悪口雑言をやる。

「やい腰抜け、出て来い、先達て貴様をぶん殴つてやつた猪八戒様のおいでだぞ——」

化物はこれを聞くと、手に赤銅の大槌を携へ、門扉を八文字に開かせて躍り出でざま罵つた。

「この野郎、よくもこの間は俺をひどい目に逢はせをつたな。今日こそ仇を取つてやるッ。」

四 金魚のお化け

靈感大王は先だつての恨みがあるから勢ひ頗る猛烈、八戒も少々あしらひかねる形なので、悟浄は寶杖を揮つて助太刀に出で、三人で戦ふこと約一時間。やがて八戒は悟浄に目くばせして一緒に逃げ出せば、化物は逃がさじと追ひかけて来る。

水面に待ち受けてゐた悟空、化物が波の中から飛び出したのを見るや、物をもいはず打ちかか

つたが、化物も利口だから強い敵とは長戦をしない。「二三合してひらりと體をかはし、また川の中に逃げ込んでしまつた。」

「取逃がしたか、ちえーつ残念や——おい兄弟、御苦労だがも一度行つておびき出して来てくれ。」

八戒と悟浄は再び水底に押しかけて行つて挑戦したが、もうその手は食はない。のみならず亂暴者で聞えた悟空などにやつて来られちやたらと思ふから、門を閉めきつた上に石や土をつんで、どうしても入れないやうにしてある。二人はいくら表で騒いで見ても、うんともすんとも

答へがないので、仕方がないからそのまま引きあげて来ました。

「兄貴、駄目だよ、俺達の武勇に恐れて、もうどうしても出て来やがらない。」

「さうか、それは困つたなア——しかしこのままではゐられないから、俺はこれから觀音様のところへ行つて、何か手段を伺つて来る。お前たちはここで暫く待つてゐてくれ。」

觥斗雲に乗つて半時間も経たぬうちに、南海普陀落迦山につくと出迎へたのは紅孩兒の善財童子。

「やあ悟空さんですか、いつぞやは御厄介をかけました。お蔭様で菩薩の御寵愛をうけて、この通りやつてゐますよ。」

「どうだい、改心して見て俺のいい人だといふことがわかつたらう——時に早速觀音様にお目にかかりたいんだが……」

「菩薩は今朝お起きになると、今に悟空が困つた顔をしてやつて来るだらうとおつしやり、すぐ裏の竹林に行つて何かしてをられます。間もなくおいでになるでせうから、一寸待つてゐて下さい。」

悟空はそのいふ通り應接間で待つてゐたが、なかなか菩薩が出て来ないので、氣がせいならん。善財その他が制止めるのも聞かずつかつか竹林に行つて見ると、菩薩はまだ瓔珞の冠もかぶらず、法衣も着けず、ただ肩から一片の薄絹をかけただけの裸體で、小刀を手にしきりに竹を削つてゐられる。日當いくらで風ふモデル女でさへ、美術家たちは美の極致として隨喜渴仰してゐるが、それが觀世音菩薩の裸體なんだから、その美しさ加減とても同日の談ぢやない。玉の如き御肌、デリケートな曲線美に、さすがの悟空も眼がくらんでたちたちたち。

「これはとんだ失禮を致しました。實は和尚様が通天河の化物にさらはれましたので、取り急いで参つたので……」

「存じてをる、お前はあちらへ行つて、わしの行くのを待つてゐなさい。」

「はい、どうも相済みませんでした。」

平身低頭して引き退り、今度はおとなしくして待つてゐると、やがて菩薩は竹の籠を持つて、竹林からお出になつた。

「さあ悟空、これから一緒に参つて三藏を救つてつかはさう。」

「なに私はさう急ぎはしませんから、どうぞ着物をお召しなすつて……」

「いやこれで差支はない。」

悟空、變に遠慮し出したが、觀音様は平氣で雲にお乗りになる。悟空も畏まりながらこれに従

ひ、間もなく通天河に着くと、待つてゐた八戒悟淨、恐縮して三拜九拜します。

菩薩は持つて来た竹籠に絲を結びつけ、雲の上からすると川の中へ下して、

「死者は去れ、生者は止め！」

と口の中で七遍念じてから、籠をお引き上げになつたのを見れば、中に一定の金魚がすくはれて、びんびんはねまはつてゐます。

氣がせいならぬ悟空は、心中甚だ不平です。

「觀音様、金魚物ひなんかは後でゆつくり遊ばすとして、早く化物の方を退治して下さいな。」

「ほほほほ、これがその化物だよ。」

「え、これが化物ですつて。こんなちつぽけな金魚がですか。」

「さうぢや、もと邸内の蓮池に飼つて置いたのだが、毎日浮き出て經文を聞いてゐるうち、自然に神通力を得て、何時の間にかこの川に流れ入り化物になつたと見える。今朝、蓮池に行つてはじめてゐなくなつたのに氣づき、すぐ竹籠をこしらへて、身づくろひもせず参つたのぢや。も

う大丈夫だから、早く行つて三蔵を救つて参れ。」

悟空は今更ながら観音菩薩の廣大な徳に感歎して、八戒悟淨とともに、出がけにこのことを村中に觸れ廻ると、陳氏兄弟はじめ争つて河べりに集まり、お歸りにならうとする菩薩を合掌禮拜する。滅多にない観音様の裸體を拜めるとはまことに幸運な人々、中に氣のきいた畫家がゐて、その時のお姿を寫生したのが、後世に傳はる魚籃觀音の像だといふことです。

一方三人は水を分けて水龍之第に下り、家來の魚族が斃死してゐる間を飛び越え、石箱の中から三蔵を救ひ出して来る。悟空は三蔵の無事を喜ぶ陳氏兄弟に向つて、

「もうこの通り化物を退治した上は、子供を食はれる心配がなくなりました——ところで一つ所望があります、至急に船を見つけて私どもを渡してくれませんか。」

「それはお易いこと、早速船を新造してお送り致しますせう。」

「私は鱧と權を寄進致したう御座います。」

「どうぞ私には船頭をさせて下さい。」

他の村人も、報恩のためいろいろな申し込みをしてゐるところへ、河の中から突然、

「悟空様、船などを造らせるのは無駄なことで御座います。私がお送り致しますせう。」

と聲をかけたものがある。一同驚いて聲する方を見れば、甲羅が八疊敷もあらうといふ世にも稀なる一疋の大龜。悟空は身構へしてはつたとばかり睨みつけ、

「貴様は何者だツ？ 一體何の緣故があつて、われわれを送らうといふのか。」

「私は決して怪しい者では御座いません。あなたは御存じないでせうが、あの水龍之第は元々私の住み家でしたのを九年前化物に奪ひ取られたのです。ところがこの度あなたのお力で退治して下さつたので、こんな嬉しいことは御座いません。その御恩報じに、せめて皆様を御送りしたいと存じて参つたのですが、若しこれでも御不審なら、嘘でない證據に、天の神々へお誓ひしませう。」

と口をあんと開いて舌をべろり。西藏の國でも、お辭儀の時に舌を出すさうだが、これが日本なら相手に怒られてしまふ。

悟空もこれで安心して、三蔵を中央に乗せ、自分は龜の首に手綱をつけて舵手の役。用意萬端整つたので、村民の禮拜を後に、川へ乗り出しましたが、龜は足を開いて急流を渡ること、さながら平地をはしるがやう。少しのローリングもビッチングもなく、八百里の通天河を、ただ一日で向う岸に着きました。

三蔵は心配してゐたこの河を、大龜のお蔭で渡り得たので、大喜びです。

「大變御苦勞をかけて、ほんたうにすまなかつた。今は別に禮をするやうなものを持つてゐないから、歸つた上でお禮をしよう。」

「いいや、私は何も戴かうと思つてしたのは御座いません——ただ天竺のお佛様に伺つて来て

いただきたいことがあります。私はこの河で千三百年も修行を積みましたが、まだ畜生界をぬけられませんが、何時になつたら人間になれますか、これを聞いて来ていたきたう御座います。」
出満龜などは違つて全く感心な龜。三蔵うなづいて見せると、大龜は首を振り振り、嬉しさをうにして川の中へ沈んで行きました。

獨角魔王

一 三人を生捕り

通天河を後に四人はまた西へ西へと進んで行くと、今度は峨々たる大山に差蒐り、時既に冬季に入つて、風雪激しく、行路の難澁さ一通りではない。携帶口糧は全く食ひ盡してしまひ、食を請はんにも家なく、一同飢ゑと寒さでへとへとになつた時、遙か彼方の窪地に立派な樓閣の聳えるのを見つけた。

「あれはたしかに寺らしい。誰か一走り行つて、食ふ物をもらつて来てくれ、わしは、もう一足も歩けん。」

さすがの三蔵も弱り切つて食糧の徴發を命じましたが、悟空は何か見るところあるかの如く、首を振つてさへぎり止める。

「彼處はいけません。家の上に悪い雲がたなびいてゐる様子は、どうも妖怪の住み家のやうだから、近寄るのは危険です。」

「でも腹がすいてたまらない、何とかしておくれ。」

「ぢや私は何處か他所へ行つて、食ひ物を見つけて來ませう。ですが必ず此處を離れてはいけませんよ。私が地べたへ圓を描いて行きますから、この中から出すに待つてゐて下さい。」

妖怪變化が近寄れぬやうに、お呪ひをしてから、ただ一人で南の方へ飛んで行きました。

残つた三人はそのいふ通り、圓の中に立つて待つてゐたが、悟空はなかなか歸つて來ない。寒さは寒し、腹は益々減つて來る、どうにもこたへられなくなつた。

「悟空は何を致してゐるのだらう——わしはもう腹の皮と背中の中の皮がくつつまさうぢや。」

三藏でさへ愚癡をこぼす始末ですから、こらへ性のない八戒などは、苦しさと不平をちやんぼんにしてうらみ言をいふ。

「人をこんな牢みたいな處に入れて置いて、奴一人、湯豆腐かなんかで、一杯やつてゐるに違ひない——和尚様、こんな吹きさらしの中に馬鹿な顔をして待つてゐるより、兎に角、向うの家へ行つて見ようぢやありませんか。風邪でも引いて肺炎になつたりしちや、つまりませんからね。」

三藏も、ついその氣になつて、ふらふら圓の中を立ち出で、這ふやうにして、先刻見た家の前まで來た。八戒は二人を待たして置いて、中にはいつて見ると、部屋々々は、綺麗に飾りつけられ、王侯貴人の住み家と思はれたが、不思議にも人つ子一人ゐない様子。これ幸ひと方々捜し廻るうち、押し入れの中に、立派などてらが藏つてあるのを見つけたから、三枚だけ巻き上げて、表に出て來ました。

「ここは空家ですよ。しかしこんな物があつたから、防寒用に失敬して來ました。さあお召しなさいませ。」

「尙ぢや、これは上等などてらではないか。たとひ人はゐずとも無斷で持つて來れば、泥棒と同じことぢや。早く元のところへ返しておいで。」

「誰も見ぢやありませんから大丈夫ですよ。和尚様がお召しにならないんなら、私たちが着て暖まるとしませう。」

悟淨にもすすめて、二人でどてらを着たと見るうち、不思議やそれが荒縄と變じてぎりぎり手足を縛り上げた。三藏驚いて解いてやらうとしてゐるところへ、一本角の魔王が躍り出し、三藏をつかんで八戒悟淨とともに洞の中に引き入れる。見れば今まで立派な屋敷と思つたのは、恐ろしい洞窟で、一行を捕へるため、かやうな手だてをして騙したのです。

かかることのあらうとは夢にも知らぬ悟空、漸くある民家から飯を無心して歸つて見ると、地べたへ描いた圓は残つてゐるが、師弟の姿も見えなければ、先刻の家もなくなつてゐる。さては俺の戒めを守らず、妖魔の毒手に落ちたかと、馬蹄の跡をしたひ、眞つしぐらに追ひかけて行く。元來この山は金兜山と呼び、獨角魔王といふ強猛な奴が、近隣に覇を稱してゐます。殊にこの魔王が持つてゐる金の輪は、どんな武器でも吸ひ寄せて、奪つてしまふ變妙不可思議な道具だか

ら、悟空が捕虜の奪還に押しかけても、首尾よく行くかどうか危なかしいもんです。

獨角魔王の住み家なる金兜洞に馳せつけた悟空は、例によつて大聲でおどし文句をならべた。「こら主人、表へ出る。われこそは唐の三藏の一番弟子、かつて天上界で勇名をとどろかした齊天大聖だぞ。早く師匠を返さばよし、愚圖々々してゐるとひねり潰してやるがいいか。」しかし魔王はびくとも致しません。

「あはははは、山猿生意氣な口をたたくな。あの和尚が俺の着物を盗んだから、つかまへて食つてしまふんだ。ついでに貴様も殺してやるから、かかつて来い！」

「何をツ、このデコボコめ。」

悟空が如意棒で打つてかかるを、魔王は一丈二尺の大槍で對し、一上二下、戦ふこと一時間にわたつたが、手練と手練に、勝敗いつ決すべしともわからない。魔王も胸中ひそかに敵の技倆に感歎し、手下に下知して一齊にかからせたので、悟空さらばと如意棒を空中に投げ上げ、一聲高く「變れツ！」と叫べば、忽ち數千の鐵棒と變じ、ばらばらと敵の頭上に落下する。さながら飛行機から機關銃でも打ち下すやう。小化物これにはかなはず、蜘蛛の子を散らす如く、洞窟へ逃げ入つてしまふ。

この有様を見てゐた魔王は、すかさず袂の中から金の輪を取り出し「著けツ！」と叫んで、空に抛り上げる。すると不思議や數千の鐵棒が元的一本となり、魔王の手中にするする奪ひ取られ

てしまつたので、悟空吃驚敗亡。こはかなはじと命からがら逃げ出しました。

二 恐ろしい金輪

悟空は山麓に退却して、善後策を考へて見たが、肝腎の如意棒を取られてどうすることも出来ない。仕方なく天上に舞ひ上り、玉帝に奏上して托塔天王、哪吒太子親子に、援兵に来てもらつたけれども、彼の金輪のために悉く武器をさらはれて同じく空手ん棒。火徳星を頼んで焼き盡くさうとしても、水徳星に来てもらつて水攻めを企てても、皆あべこべに攻め道具を巻き上げられてしまつて、どうにもかうにも施す術がありません。

しかも金兜洞の方では大得意で、小化物が門外に出て来ては赤んべいをしたり、尻をたたいて見せたり、しきりに天軍を嘲弄します。血の氣の多い悟空は、これを見て矢も楯もたまたらず、所謂赤手空拳で敵陣に躍り込みました。

「無禮な奴め、この拳でなぐり殺してやるツ。」

と大勢の中を滅茶苦茶に暴れ廻る。味方の悟空がこの無鐵砲に、托塔天王は天上から心配して「悟空君、靜肅に靜肅に。」と議長宜しく注意をするが耳に入らばこそ、益々やけになつて拳骨を振り廻す。魔王もしからばといふわけで拳骨で相對し、宛然たるボキシング試合。悟空が毛を吹いて三十五疋の小猿をこしらへ、魔王を引つ掻かせようとするれば、手下の小化物が群がりかか

つて、これをさへぎる。猛闘亂撃、正に一トころの鎌倉を見るやうな騒ぎです。

そのうち、魔王は例の金輪を投げたので、悟空配下の小猿は悉くもとの毛になつて吸ひ込まれた。悟空があつけに取られてゐるのを、尻目にかけて魔王。

「どうだい、驚いたらう。もういい加減に降参したらどうだ。俺は歸つてあの和尚を肴に一杯やるから、その間にゆつくり考へて来い。ちや、アバヨ！」

と、散々ひやかして洞窟の中に入り、びたり門を締切つたきり後は何といつても出て来ない。悟空扉の隙間から覗いて見ると、中では酒宴の支度に急がしい様子。まごまごしてゐると三蔵が食はれてしまふかも知れないので、大急ぎで引返して援兵の神様たちと相談して見たが、いづれも溜息をつくばかり。武器を取り上げられてゐる上、金輪の絶大な威力に恐れをなしてゐるから、誰にもいい考へが浮びません。

悟空もほとほと思案に困じたが、しかし愚圖々々してゐる場合ぢやない。兎に角敵にあの金輪さへなければ何とかなるだらう。最後の手段、あれを盗み取る外はないと考へ、決然として立ち上つた。

「よござんす。私が忍んで行つて金輪を盗んで来ませう。その上で總攻撃をなすつて下さい。」さてこれがうまく行けばいいが――。

悟空は身を變じて一疋の蛾となり洞内に飛込んで見ると、百目蟻燭をかんかん點した部屋の正

面に獨角魔王が大胡座。左右に家來の化物どもが居並び、珍味佳肴を前にして飲みや唄への大騒ぎです。

「……悟空の性なら空手で来い、八戒の性なら阿呆で来い……」

などと即席の破節ではしやいでゐるのを、魔王は大杯を傾けつつ、さも愉快氣に眺めてゐる。

悟空は癪にさはつてたまらないが、まだ三蔵が料理されたやうちやないから、やや安心して暫く機子を窺つてゐるうち、魔王は晝の疲れと酒の酔ひで大分眠くなつた風。

「俺はもうやすむから、お前達は充分飲むがいい。ただ悟空が忍んで来るかも知れないから、戸締りを嚴重にして置くんだぞ。」

と一人で寢室に退き、間もなく、ぐうぐう高いびきをはじめた。

これを見た悟空は寢室に飛んで行つて、今度は南京蟲に變じ、汗くさいのを我慢しながら魔王の床の中にはいつて見ると、例の金輪はしつかり手首にはめて抜けないうやうにしてある。何とかしてこれを外させたいものと、這ひよつて行つて、いやといふ程手首をちくり。

驚いた魔王、むつくり起き上つて、着物をばたばたはたいたので、悟空の南京蟲はたまらず床の上にはたき落される。魔王はこれを見つけて、指先につばをつけ、押へつけようとしたが、ここで潰されては大變、辛うじて柱のわれ目に隠れ、命だけは助かりましたけれども、またも散々の失敗で、さすがの悟空も萬策盡きた形です。

かういふ時は観音様のお力を借りたいのだが、つい先達てお頼みしたばかりなので、またといつて行くのはどうもきまりが悪い。仕方がないから、今度は大親分のお釋迦様に願つて見ようと、伽斗雲に乗つて、天竺雷音寺へと出張する。

釋迦如來は世界中を見通す眼力をもつてゐられるから、悟空が何しにやつて來たか、ちゃんと御存じです。

「たうとう弱つてやつて來をつたな。あの化物はお前の手には合ふまいから、十六羅漢を遣はして手傳はせてやらう。」

「全く今度は參つてしまひました。十六羅漢でも五百羅漢でもかまひませんから、うんといふ目にあはせるやうにして下さいませ。」

「よしよし——だが決して無益な殺生は致すなよ。」

三 釋迦にも策なし

羅漢は命令によつて、金丹砂といふ丸薬みたいなものを一粒づつ携へ、悟空と一緒に雲に跨がつて金兜山につくと、負け戦で情氣返つてゐた托塔父子はじめ諸々の神たちは、百萬の援兵を得たやうな喜び方。作戦について鳩首凝議した後、悟空は先づ化物のおびき出しに向ひました。

「やい角足らず！ 今度こそ負けないぞ。痛い目を見ないうち、降参するなら許してやるが、ど

うぢや。」

「性こりもなくまた來たか。擒にした和尚がほしいなら、食つた後で骨をやるから、歸つて待つてをれ。」

「何を失敬な、今あべこべに貴様を骸骨にしてやるぞッ。」

武器がないから拳骨を振り廻してかかると、魔王は槍で突いてかかる。悟空左右に身をかはしながら、洞外遠く誘ひ出して來たのを見はからひ、空中の羅漢、ばらばらと金丹砂を投げかければ、近所は見る間に一面の砂原。二三尺位づつ、とぶりとぶりと足がもぐり込んで、ちやうど粟津の田圃にはまつた木曾義仲みたい。

魔王一時は驚いたが、腕をさぐつて例の金輪を投げ上げるや、砂はもとの丸薬になつて悉く魔王の手中にぶんどられる。羅漢連、アツケラカンと開いた口がふさがらないでゐるうち、魔王は

「ヘンさまあ見ろ。」と舌を出して、洞内に引きあげれば、家来どもは嬉しがつて、

「羅漢さんが揃つても、なつちよらんぢやないか、ヨイアサノヨイアサノ。」

などと悪口のコラスをやります。

釋迦牟尼佛のお手傳ひだから、今度こそは大丈夫と思つたのに、またまた失敗に終つたので、羅漢さんの悲観はもとより、ただ顔見合せて青息吐息、一軍慘として一語を發する者もありません。

一同思案に餘つて頭をうな垂れてゐると、降龍伏虎といふえらさうな名の羅漢が、何か思ひ出したやうに、ボンと膝をたたいて悟空に申しました。

「さうさう如來様がおつしやいましたつけ、若し化物の通力にかなはなかつたら、黒燒屋總本家の太上老君のところへ行つて、化物の詮議をして見ろとのことでした。」

「さうですか、それならさうと早くいつて下されば、あなた方に御苦勞をかけなかつたのに——ちや早速私が行つて見て來ませう。」

筋斗雲に乗つて大急ぎで駆けつけ、老君に遇つて仔細を話しましたが、悟空にはこれまで長命丸をかつ拂はれたり、反魂丹をユスられたりしてゐるので、老君の心證が餘りよろしくない。

「君は變なことをいふね。何も三藏の遭難に、わしが關係する筈がないぢやないか、よそをたづねて見たまへな。」

素氣なくはねつけようとしたが、如來の言葉があるのだから、悟空はおとなしく引き退ることをしません。

「宜しい、そんな人情のないことをいふなら、俺が勝手に吟味してやる。」

亂暴な奴でどんだん殿内に闖入し、家宅搜索を開始すると、牛小屋にゐる筈の牛の姿が見えぬ上、番の子供が小屋の前にグーグー寢込んでゐます。

「それ見たまへ、この牛が飛び出して化けてゐるのに違ひない。一體いつ逃がしたんです。」

「おやおや、これは知らなかつた——おい小僧起きろ、どうして貴様は牛を逃がしたのぢや。」

小僧はびつくりして跳ね起きたが、牛のゐないのに氣がついて、あたりきよるきよる。

「どうも濟みません。先達て藥局に落ちてゐた丸藥を拾つて食べましたら、そのまま寢込んでしまつて、牛の逃げたのを知らずにゐました。」

「怪しからん奴ぢや、あの丸藥は、七日間眠りつづける藥だから、その間に逃げ出したのだらう——おやおやおや、あん畜生、金剛珠をかつ拂つて行つたぞ！ さあ大變だ！」

老君今度は寶物の紛失に氣がつき、色を失つて慌て廻る。この金剛珠こそ例の魔王が持つてゐた金輪で、武器はもとより水でも火でも巻き上げてしまふといふ珍品。これがないとなると、仙家の沽券にかかはる大問題だから、今度は老君の方から頭を下げて悟空に頼み込む。

「先刻はつい失敬なことをいつて濟まなかつた。どうか君、その化物のゐるところへ案内してくれたまへ。」

「さう折れて出られりや文句はないさ。俺も心がせくので家捜しなどをしたが、話しがわかれば一緒に行きませう。」

老君はも一つの寶物たる芭蕉扇を携へ、悟空と共に金兜洞に來て見ると、獨角魔王はもう誰も攻めて來まいと安心して、洞窟の前に縁臺を持ち出させ、悠々と日なたぼつこをしてゐます。

悟空これを見ていきなり雲を飛び下り、物をもいはず魔王の横面をなぐりつけて逃げ出す。魔王は怒つて追つかけて来た時、雲の上から、

「これ牛よ、お前は何時まで家に歸らずに、遊んでゐるつもりぢや。」

と思ひがけない主人の聲に、脛に傷持つ魔王は、思はずはツと立ちすくむ。老君呪文を唱へながら、芭蕉扇で煽ぐと忽ち本相の牛に返り、四つ足をついて這ひつくばひ、

「モウモウ、悪いことは決して致しませんから……」

とあやまつたので、老君は取り上げた金剛琢を牛の鼻に通して手綱をつけ、一同に別れを告げて天上来にひき歸りました。牛の鼻に金輪をはめるのは、蓋しこれから始まつたのださうです。

悟空は神々たちや羅漢とともに洞窟にはいつて、捕虜になつてゐる三人を救ひ出し、分捕られた武器を収め、貯蔵の食料を料理して、もとでいらすの慰勞會を開催する。デザートコースに入つて悟空から、一場の挨拶を述べ、三蔵は自分の輕學から、神々に御苦勞をかけたことを深謝しましたが、八戒はさすがに恥ぢて、隅つこに小さくなつてゐるきり。それでも御馳走の方は、抜け目なく平らげてゐました。

女人國の難

一 三蔵八戒孕む

慰勞の宴も盛會裡に終りをつけ、神々は前途の幸福を祈つて、それぞれ郷里に引き揚げ、三蔵法師も支度を整へ、また天然に向つて進發する。

行く行く冬も過ぎてはや春の初め、一行はとある川にさしかかつたので、對岸の渡船小屋を呼びかけますと、やがて船に棹さして漕いで來たのは、年寄りの女船頭です。

「お婆さん、お前で大丈夫かい、父さんはんはゐないのかね。」

「えへへへ、御心配なさいませぬ、ここぢやみんな女が稼業してゐるので御座いますよ。」

「さうかい、ぢやアやつてもらはう。」

悟空は三蔵を助け、馬や荷物諸共、船に乗り込むと、婆さん如何にも上手に水棹をあやつる。兩岸の楊柳緑を垂れ、春風和やかに頬を吹いて、いかにもいい氣持。殊に清冽な水は底の小石も數へられる程なので、三蔵と八戒は手で掬つて、咽喉を潤したりなどしてゐます。

最近、黒水河と通天河で二度も大難にあつたが、幸ひこの川は何事もなく西岸に到着。婆さ

んにそこばくの渡し錢をとらせ、四方の景色をめながら、笑ひささめいて進んで行くうち、半時間ばかりたつたかと思ふ頃、三藏は急に腹痛を催し、馬から落ちんばかりに苦しみはじめる。と續いて八戒も痛み出し、腹を抱へてころがり廻る騒ぎ。

悟空と悟浄には別状がなかつたが、何とていいのやら、これには全く閉口してしまつた。

「先刻水を飲んだのがあつたのかも知れない。兎に角、どつか家をさがして、湯か薬をもらふとしよう。」

刻々苦痛のつる二人を助けつつ、やうやう一軒の茶店を尋ねると、中に一人の婆さんが麻を紡いでゐます。

「お婆さん、一つたのまれてくれませんか、この邊にお醫者があるなら、急いで腹痛のなほる薬をもらつてきて下さい。」

「おやおや、一體どうなすつたんですか。」

「實はこの二人があつた川の水を飲んだせゐるだか、急に苦しみ出して、弱つてゐるんです。」

「何です、あの川の水を飲んだんですつて？ それは大變、ぢや身持になつたんだから、薬を飲んだつて駄目ですよ。」

可哀さうだよ白歯で身持といふことはあるが、男の妊娠は盡し破天荒の大珍事。しかし婆さんの説明を聞くと、珍事でも奇蹟でも何でも無い。

元來ここは西梁女人國といふ國で、一國悉く女ばかり、二十歳になると、先刻三藏と八戒が飲んだ子母河の靈水を飲んで妊娠し、人種の繁殖を計るのだが、腹痛を覚えるのは即ち完全に受胎した證據で、薬や湯を飲んだところが、腹痛のなほりつこないといふのです。

八戒は苦悶しながらもこの話を聞きつけ、悟空にすがりついて狂氣のやうに泣き悲しむ。

「ああ痛い痛い、腹のかたまりのきりきりと動くのは、産氣がついたのかも知れん——しかし一體どこから生れるのだらう。」

「さうさな、大方脇の下でも裂けて生れるのかも知れないな。」

「それぢやア死んぢまわあ——兄貴、拜むから、どこかへ行つて、上手な産婆をたのんで来ておくれよう。」

三藏の方も陣痛がひどくなつたと見えて、悶えながら婆さんに頼みます。

「お婆さん、一つこの邊のお醫者に頼んで、墮胎薬をもらつて来ておくれ。」

「いいえ、薬ではとてもききません——ただこれから三千里もある解陽山の落胎泉を飲むと墮りるさうですが、湯山お錢を持つて行かなければ賣つてくれないから、あなた方では望みのないことです。まあ諦らめて赤ン坊をお生みなさいまし。」

悟空は八戒をひやかしたものの、二人をこのままには捨て置けないから、婆さんの話を聞くや、急いで雲を呼んで飛び出しました。

「和尚様、しばらくお待ちなすつて下さい。私とその解陽山に行つて水を買つて来ますから……」

悟空は間もなく解陽山に着陸して、股間に落胎泉の分譲を頼みましたが、主の如意真仙は例の牛魔王の弟で、甥の紅孩兒が悟空に苦しめられた恨みがある上、この水を法外の値で賣つて金儲けをしてゐるので、一滴たりとも口へはくれません。

「銀一文持つて来ずに、この貴い水を分けてくれなんて、蟲がよすぎるぜ。それに聞けば、貴様等は俺の甥を、散々な目に逢はせたさうぢやないか。そんな失禮な奴に、大事な靈水をやつてたまるもんか。」

「そんなことをいふもんぢやありませんよ。あなたの兄さんの牛魔王は私と兄弟分の杯を取りかはした仲だから、私はあなたとも満更の他人ぢやないでせう。あの紅孩兒だつて善財童子となつて觀音様のおそばつかへをする、かへつていい身分になつたぢやありませんか。どうぞほんの少しでいいんだから、水を分けて下さいな。ねえ先生つたら……」

しきりに媚びを呈して水をねだらうとするが、これが窺窺たる美人でもあるなら兎も角、毛むくぢやらの猿坊主ぢや、どつとしない。

「氣味の悪いやつだな、誰が貴様なんかと兄弟になるもんか——駄目だといつたら駄目だよ。」

「さうつれないことはいはずにさ、仙人姿でありながら、お前は鬼か真仙さん——」

「うるさいな、畜生ツ——」

十六夜もどきで口説くのを耳にもかけず、持つたる鐵如意で悟空の頭をポカンとやつたから、悟空も最早平和の手段を捨てる外はない。耳の穴から如意棒をひねり出して打つてかかり、兩々しばらく相戦つたが、真仙もとより敵せんやうなく、如意をかついですたこら逃げて行く。

しかし、悟空はこれを追つかけず、裏庭の門を破つて躍り込んで見ると、目ざす落胎泉と覺し、周圍に注連繩を張り廻した井戸があります。これさへもらつて行けばいいんだから、釣瓶繩をとつて水を汲み上げようとするところへ、窺ひ寄つた真仙が悟空の足へ如意を引つけてくいと引く。悟空たまたま倒れる拍子に、持つて来た水を入れる瓶が粉微塵。仕方がないから釣瓶のまま持つて行つてやらうと、一旦真仙を追ひ拂つて置いてまた汲みにかかるのを、さはさせじと後から忍び寄つて引つかけ倒す。悟空弱つてしまつて左手で棒を振り廻しながら、右手でやうやらやつと釣瓶に半分ばかり汲み上げるや、後をも見ずに一目散。真仙は「水泥棒々々」と叫んで後追ひかけたが、悟空の早足にはとても追ひつけません。

刻々陣痛のつづつて来る八戒、こらへかねて表にはひ出し、門によりかかつてうめき苦しんでる様は、正に雨に惱めるかばちやの花といった風情。そこへ待ちかねた悟空が、釣瓶片手に歸つて来た。

「おお兄貴、水を持つて来てくれたかい。」

「はははは、八公まだお産前なのか、どんな赤ン坊を生んだかと、楽しみにして来たのに……」
「ああ痛い痛い、冗談いはずに早く飲ましておくれよう。」

悟空は主の婆さんから杯を借りて、先づ三藏に一杯をすすめ、その後で八戒も二三杯がぶがぶやつたが、やがて兩人ともころろ腹が鳴り出して来た。殊に八戒の方は薬がきき過ぎたと見え、床の上をのたうち廻つて大小便を垂れ流す騒動。兎角するうちに痛みも収まり、腹の中のかたまりもすつかりとけて、もと通りの身體になりましたから、いづれも大喜びです。

「八公よ、たうとうお前もお母さんになり損ねたな。」

「ひやかすない兄貴——それよりか俺は腹がべこべこだ。早く何か食はしてくれ。」

「先づ身體を洗つてからにしろ、臭くてたまらんぢやないか。」

婆さんに頼んで腰湯をつかはせてもらひ、それから白粥の馳走をうける。八戒またたく間に、平らげること十八杯、産後の静養にその夜はここに一泊し、靈水の残りを置きみやげにして、翌朝元氣よく出發しました。

二 女王の花婿に

それから三十里ばかりを歩んで西梁女人國の都に着きましたが、いかさまその名の通りに、官吏でも町人でも土方でも車屋でも、何でもかんでもすべて女。三藏師弟が入京したのを見るや、

機敏な新聞社が「ただ今唐國より男子四人入京せり」といふ號外を出したので「それ男が来たさうだ」「人だねが現れた」などと、市内はもとより近郷近在からまで、うようよ見物が殺到し、目ひき袖ひき品定めをする。三藏の綺麗な和尚ぶりは衆目憧憧の焦點となつて好評噴々だが、男は男でも外の三人は一向問題にならん様子。

政府にもこの噂が聞えたので、警視總監自ら騎馬巡查を従へて出張、人波で動きがとれないでゐた一行を迎陽館に案内し、直ちにこの旨を閣下に奏上すると、女王は相好をくづして大喜びです。

「それは嬉しいことぢや。開闢以來男といふものなかつたこの國へ、唐の高僧が見えたのこそ幸ひ、是非とも國王になつていただき、わが身は皇后となつて妹背のちぎりを結び、子孫の繁榮をはかることにませう。ゆうべ夢見がよかつたのも、この吉兆であつたのぢやらうわいな。」

この女王殿なかなか押しが太い。ならびゐる閣僚諸姉も御意の通りにと賛意を表し、總理大臣が一同を代表して奉答する。

「かくてこそ竹の園生の御榮え、いや榮えに榮えて目出度き限りで御座います。ですが三人の弟子たちは如何に致したら、宜しう御座いませうや。」

内心閣僚たちで引き受けたい様子でしたが、三人の醜い容貌を知つてゐる警視總監は、それと知つてか知らずか、女王に進言します。

「あの和尚様だけは立派なお顔立で、國王としても少しも恥かしいことは御座いませませんが、三人の弟子は一人化け九とでも申すやうな悪相で御座います。これはあの和尚様だけをお残しになりまして、三人を天竺へお遣はしになつた方が宜しう御座いませう。」

「左様か、しからは和尚様だけをとどめるによつて、お前と總理大臣が仲人役になつてくりやれ。これから二人で参つてこのことを話し、縁談がまとまつたならば、わが身がすぐお迎ひに参りませうぞ。」

總理と總監は命をかしこみ、すぐ様迎陽館に出かけて、三藏に面會しました。

「唐國の和尚様、お目出度う御座います。私どもは女王陛下の命令で、この上もない喜びごとをお知らせに参りました。」

「出家の私に目出度いこととは、如何やうなことで御座りますか。」

「御覽の通り當國は女ばかりの國。そこへあなたがおいでになつたので、女王はこの國を婿引出ものとしてあなたに差しあげ、皇后になつてかしづきたいと仰せられるので御座います。こんな目出度いことは御座いますまい、さあどうぞ御承諾なすつて下さいまし。」

「……………」

思ひがけない女王の求婚に、三藏は何と答へていいか當惑し切つて、うつむいたままもちもちしてゐると、女官等は恥かしかつてゐるのだと思ひ、頻に勸誘につとめます。

「こんな結構な話はないぢやありませんか、殿方はさうぐづぐづ遊ばすものぢや御座いません、さあ早くうんとおつしやい。」

「それぢやと申して……これ悟空何したらよからうな。」

三藏泣き顔になつて助け船を求めましたが、悟空は鹿爪らしい顔をして答へる。

「左様で御座いますな。私の考へでは和尚様はこのお婿様になつて、お子さんを儲けられ、裕福な一生をお過しになつた方がいいやうに存じます。天竺の經文は私ども三人が行つてもらつて参りますから、御心配はいりませんよ——お仲人様がた、宜しう御座います、私がお引受致しました。」

三藏をさし置いて承諾の確答をしたので、總理、總監は大喜びで王宮に立ち歸る。抜け目のない八戒は後から大聲で呼びかけます。

「もしもし御婚禮の宴會には、うんと御馳走をして下さいよう。」

あつげに取られてゐた三藏は、二人の女官が歸つて行くと、悟空のそばににぢり寄つてなじりました。

「これ悟空、お前はわしをなぶり物にする氣ぢやな。わしに心にもない結婚をさせて、お前たちだけ天竺に行くとは何事ぢや？ わしは死んでもそんなことはせんぞッ。」

「和尚様御心配なさいますな。私はちゃんとおあなたのお心持を存じてはをりますが、ああ申したのは一時のがれの方便です。若しいふことをきかないと旅券の査證をしてくれぬばかりか、大勢であだをするかも知れません。殺して逃げ出すのは譚はありませんが、それは和尚様の御本意ではないでせうと存じまして……」

「だが、今に女王と結婚式を挙げれば、どうしても佛家の戒めを破り、俗人に墮落せねばなるまい。それをどうすればいいのぢや。」

「お氣遣ひなさいますな、あなたは何食はぬ顔で婚禮の式をお済ましになり、私ども三人が出發する時、皇后様をすすめて一緒に城外まで見送つていらつしやいませ。そして私が不動金縛りの法で一同を身動きの出来ないやうにし、あただけお連れ申して逃げ出させよう。百里も行つてから法をとけば、雙方とも怪我がなくて済むでは御座いませんか。」

「如何にも、さういふ下心でやつたのか、では兎に角、式だけはするから後をうまくやつてくれよ。」

師弟額を集めて逃げ出しの手筈を打ち合せてゐるところへ、念入りに化粧をした女王は、御車の前後を女儀仗兵に護衛させ、第一公式の南簿で婚殿のお迎ひにやつて来た。先觸れの知らせにより、三藏等は館の前に出迎へて見ると、さすが一國の王様だけに、ただ美しいばかりでなく充分の威厳も備はり、恰度高尾太夫とクレオパトラをつきまぜて二で割つたやうな秀麗さ。好きも

の八戒などは、「口角涎ヲ流スコト一時間、骨軟ラギ筋痺レ、恰モ雪獅子ノ火ニ向フガ如ク」
とろとろ溶けさうになつて見とれてゐます。

初めて男といふものを見る女王の眼にも、醜男揃ひな三人の弟子に比べて、三藏の容貌は十數段立ちまさつて映じたに相違ない。車を降りるや、いそいそ三藏のそばに寄つて手を取りました。

「おお何とまあお立派な……さあさあ一緒に御殿に参りまして、成婚の儀式を致しませう。」
生れてから、女のそばにも寄つたことのない三藏が、絶世の美女に手を握られたんだから一大事、身體中の血が一時に逆流し、ポーツとなつてしまつて、わなわな慄へてゐるばかりです。悟空は見かねて、

「お師匠様、さう御謙遜遊ばさずに、皇后様と御車にお乗りなさいませ。そして私どもに旅行免状をお下げ渡し下さいませ——」

とすすめたので、三藏も仕方なく強ひて嬉しさうな顔を装ひ、女王と膝をならべて車の中に腰をかける。沿道の民衆堵列して奉拜する間を、南簿肅々、還御の途についたが、弟子たちには一向構つてくれないから、荷物をつぎ馬を引いて、のこのこ行列の後について行く始末です。

宮中ではすでに官報號外を以て「本日大婚の式を行ひ、明日即位式を擧げて改元する」旨を國內に發布し、一方大膳職、式部職が腕によりをかけて、大饗宴の準備萬端整うてゐます。
三藏と女王は囁々たる奏樂の間を、手を取り合つて正面一段高きところに着座すれば、盛裝を

凝らした文武百官花の如く左右に居流れる。やがて總理大臣が兩陛下の御前に進み出で、黄色い聲で、何やら祝辭を述べ終ると、山海の珍味が一同の前に運び出され、君臣杯をあげて喜び合ふ様、若し女學校の同窓會に酒でも出したら、恰度こんな風だらうと思ふやうな賑かさ。

悟空等三人は遙か末座で陪席の榮に浴しましたが、何しろ客も給仕も悉く女ですから、その美しさ目も眩まんばかり。八戒などは有頂天になつて酔つ拂つてしまひ、

「めでためでの若松様よ、枝も榮えて葉も茂る、ああ、こりやこりや。」
などと、のどを聞かせるつもりかなかで、はしやいでゐます。

三 女怪に浚はる

三藏もどうやら落着いて来て饗宴の賑しさを眺めてゐると、八戒が場所柄もわきまへず、何か唄つてゐるのに目がついた。そこで胸に一計を案じ、わざと眉をひそめて女王に話しかけます。「どうも禮儀を知らない弟子がゐて困ります。早く天竺に立たせてやりたいから、旅行免狀を渡してやつて下さらんか。」

三國一の花婿殿のいふことだから女王は唯々諾々。すぐ免狀に玉璽を押して悟空に授け、路用の金子をはなむけにしようとしたが、これは辭退して受けません。

「では御師匠様、私たち三人で天竺に行つて参りますから、あなたは末長く女王様とお添ひ逢げ

遊ばせ。歸りにはまたお立ち寄りしますが、その頃には、可愛い赤ちやんがお生れになつてゐることせうな。」

目くばせをしながら、まじめ齧つて別れの挨拶をする。三藏も何食はぬ顔で、

「左様か、長々世話になつたのに名残りの惜しいことぢやの——せめて城外の邊まで見送らうと思ふが、そなたも一緒に参つてくれぬか。」

大分亭主の板についた口調で、女王に同行をすすめると、もとより謀りこととは知らないし、一刻も三藏のそばを離れるのがいやだと見え、即座に鹵簿の用意を命ぜられる。坊主だませばでなく、坊主の方で女をだますんだから全く罪な話です。

なり立ての夫婦が、また相乗りで城の西門まで見送つて來ると、かねて打ち合せて置いた通り、悟淨が鳳轎に近寄つて聲をかけます。

「遠いところをお見送り下さつて有難う御座いました。ではここで別れ致しませう——さあ、和尚様。」

手をあげた合圖に、三藏ひらりと車から飛び下りて、後振り向き、

「わしも矢張り天竺へ行くことにするから、そなたはここから歸つたがいい。ちや、どなたも御機嫌ようお歸りなさい、左様なら……」

JOAKのアナウンサーみたいな拾遺詞をいつて、すたすたかけ出したから、女王はことの意

外に吃驚仰天。

「あなた、さては心變りしたんですね。これ誰でもいい、早くあの人をつかまへておくれツ——
三藏殿へのオー！」

威嚴もたしなみもうち忘れ、金切聲を振りしぼつて狂亂する有様は、日高川の清姫を唐様にしたかたち。何せいとし可愛の男に、結婚したばかりで、一夜も添はぬうちに逃げ出されるんだから、その胸中うたた同情に堪へません。

臣下の者や拜觀の民衆も、新國王逃げ出しといふ稀有の椿事に、右往左往の混亂。中に勇氣のある女どもが、つかまへて恩賞に預からうと、勢ひ込んで追ひかけて来る。悟空はこれを見て、豫定の通り、不動金縛りの印を結ばうと、身構へをした一刹那、群衆の中から飛び出して来た一人の女。

「和尚様、わたしと夫婦になつて仲よく暮しませうよ。」

といふが早いか、三藏を横だきにだきあげて、見る間に空中に舞ひ上り、姿をくらましてしまつた。

女人掠奪なら、日本でもたまに聞く話だが、女が野郎をかつ拂つた話は、聞いたことがない。ものさうとしたものをものされて、がらり目算のはづれた悟空、しばしは呆然としてゐたが、やがて氣を取り直して雲に飛び乗り、四方を見廻すと、一陣の旋風が雲をまいて、はるか彼方を飛

んで行くのが見えます。

「八戒悟淨！ お前たちも早く續いて来い。」

いひ残して後追ひかけて行つたので、二人は荷物を馬にくくりつけ、同じく雲を呼んで離陸追跡する。女王はじめ文武百官の驚愕は、薦に油揚をさらはれたところの騒ぎぢやない。

「さてはあの方々は、白日昇天の羅漢であつたか。世の常の男と思つて、とんだ失禮なことをした。」

と一齊に地にひざまづいて、後姿を伏し拜み、齒簿を収めてすごすご城中に立ち歸りました。

一方悟空は勦斗雲に馬力をかけて、三藏をかつ拂つた女怪を追ひかけましたが、向うも相當スピードがはやくて、なかなか追ひつけません。五六百里も来て峨々たる大山にさしかかるや、急に旋風がやんだと思ふと、女の姿がふつと消えてしまつて、どこへ行つたか皆目分らなくなりました。さてはこの山こそ怪しいと、雲を下りて方々捜して見たところが、屏風の如く立つた

青石の蔭に、思ひがけなく大きな石門があつて、「毒敵山琵琶洞」と刻みつけてあります。

「お前たち二人は暫くここで待つてゐてくれ、俺は中にはいつて見て来るから……」
悟空姿を蜜蜂と變じ、扉の隙間からもぐり込んで、座敷に飛んで行つて見ると、先刻の女怪が

三藏の膝にしなだれかかり、腰元どもの手前も憚りなく、頻りにかき口説いてゐる。

「和尚さま、さう堅くならずにとお寛ぎあそばせよ——ここは西梁女人國のやうに裕福ではありませんが、閑靜でそれやいところで御座いますよ。どうぞ私の旦那様になつて、面白をかく友白髪まで一緒に添ひ送らせて下さいませ。」

頗る濃厚に持ちかけるが、三蔵は眼を閉ぢ、ただ黙りこくつてゐるばかりなので、これは氣長にやつて落城させる外はないと思つたか、腰元に命じて酒肴を取り寄せました。

「まあ何か召し上りましたな、あなたは生真物は召し上るまいと思つて、精進料理をこしらへましたのよ。」

何とかして氣に入るやうにと、一生懸命に御機嫌とりにかかる。三蔵もかほどにされて一言も物をいはず、箸も取らんでゐては却つて身のためになるまいと思ひ、強ひて嬉しさをな顔をしませ。

「あなたの親切はようわかりました、では精進料理の方をいただきますませう。」

と實は大分お腹もすいてゐたので、いそいそ頂戴に及びます。女怪はいよいよ三蔵が参つただと喜び、今度は饅頭を二つにさいて差出しました。

「ねえあなた、この饅頭を半分づつ仲よく食べませうよウ。」

「さうかい、あいよ。」

などとにやにやして寄り添ひながら、ばくついてゐる光景は、さしにも道心堅固な三蔵も、女の艶色に心奪はれて、破戒墮落したのではないかと疑はれるやうな睦まじさ。

蜜蜂の悟空は、見せつけられてたまりかね、いきなり本相を現はして怒鳴りつけた。

「和尚様だまされちやいけません——この阿魔、無禮なことをすると許さんぞッ。」

女怪は驚いたが、急に口から煙を吹いて悟空の眼をくらまし、その間に三蔵を押し入る中に隠してから、槍をふるつて勢ひ鋭く突いてかかつた。

「人の戀路を邪魔をする山猿め、誰の許しを得てこの家にはいつたのぢや、さあ尋常に勝負致せ。」

悟空が鐵棒であしらひながら、洞外におびき出すと、待つてゐた八戒悟淨は熊手と寶杖で加勢に出る。これを見た女怪はひらり飛び上つて、悟空の頭を何かで刺したかと思ふと、その痛いことといつたら、さしもの悟空もあつと叫んで頭をかかへ、ただもう一目散。兄貴がこの始末に、兩人もすつかりおぢ氣づき、後に續いて夢中に山を逃げ下りました。

女怪が用ひたのは「倒馬毒」といつて、ただ一刺しで馬をも殺すといふ恐ろしい毒薬です。二人が追つて見ると、悟空は紫色にはれ上つた頭をおさへ、道ばたの草原に打ち倒れ、顔をしかめて、うんうん唸つてゐる。

「兄貴、一體どうしたんだな。」

「どうもかうもない。彼奴に、ちくりやられたと思ふと、腦天が割れるやうに痛むんだ。ああ痛く、痛く。」

「だつて兄貴の頭は昔八卦爐できたへて、矢でも鐵砲でも平氣だといふ、自慢の石頭ぢやないか。」

「何だか知らんが、今日は参つた。この邊に醫者がゐるなら呼んで来てくれよう。」
「こんな山中に醫者なんかありやしないよ。仕方がないから濡布でもしてやらう。」
八戒は、布切れを水に浸して来て、墨法を施して見ましたが、なかなか痛みの去る様子がありません。

四 倒 馬 毒

悟空が倒馬毒のため重傷を負うたので、三藏の奪還は翌日まで延期となり、三人は不安な一夜を草原の上で送ることとなりました。

一方女怪は邪魔物を追つ拂つてしまつたので、これからゆつくり三藏をものにしてやらうと、洞の扉を嚴重に閉し、寢室に香をたき、また酒肴を取り揃へていろいろとすすめました。三藏はまるで石佛同様、眼も口もふさいだつきり、うんともすんとも答へがない。この邊を本文の直譯體で行くと「女怪充分嬌媚の態を弄出し、房に入らん事を願ふ、唐僧彼に従はずんばわが命を害せんことを恐れ競々として香房に入り、低頭語らず、女怪百般の雨意雲情をなすと雖も、僧漠然として聞かず見ず、座して半夜に至る」といふのですから、閨房に引入れて女から搦腕を向けても、一向に箸をとらなかつたといふのでせう。

かく馬力をかけて口説いたにかかはらず、三藏いつかな落城しないので、可愛さ餘つて憎さの

たとへの通り、女怪はたうとう怒り出してしまつた。

「この意氣地なしの、インポテントめ——誰か来てこの坊主を縛り上げておくれ。」

手下にいひつけて猿縛りにした上、天井につり上げさせ、ぶんぶんいひながらあかりを吹き消して、獨り床につきました。

山麓に退却した悟空の負傷は、翌朝になつてもまだ全快しなかつたが、捕虜になつてゐる三藏の身の上が心配でならない。

「おい悟浄、俺はまだ痛みがなほらないけれども、兎に角、和尚様の様子を見に行つて来る。お前はここで馬と荷物の番をしてゐてくれ。」

餘り進まぬ八戒をつれて洞外におもむき、例の如く蜜蜂になつて中にはいつて見ますと、無残やな三藏は、居酒屋の章魚みたいに、宙につるしあげられてゐる。

「和尚様、悟空です。ゆうべはいいことが御座いましたかね。」

「おお悟空か。わしは死んでも彼奴のいふ通りにならうとしなかつたので、たうとう怒つてこんなに縛り上げられたのぢや。どうか早く救ひ出しておくれ。」

「よごさんす。今助けて上げますから、ちよつと待つていらつしやい。」

二人がひそひそ語り合つてゐる聲に、女怪は不圖眼をさましました。

「この坊主、何を獨りで喋舌つてゐるのぢや。」

蜜蜂には気がつかないから、起上つてきよろきよろ見廻してゐるので、悟空慌てて門外に飛び出し、有りし様子を八戒に告げました。

「和尚様は清淨潔白でいらつしやる。ただ俺があの子に見つけられさうになつたので、一旦逃げ出して来たんだ。」

「さうか、それでこそお師匠様だ。よしよし今度は俺が行つて救ひ出して来よう。」

八戒柄になく感激して、熊手で門の扉をがたがたたきながら、口ぎたなく罵り立てます。

「やいすべた女め、和尚様を返さぬと、素ツ裸にしてなぶり殺しにしてやるぞ。」

これを聞いた女怪は、槍おつ執つて門外に躍り出で、物をもいはず八戒に突つかかる。八戒熊手で立ち向つたが、突きまくられてたじたじの體に、悟空本相に返り、棒を揮つて助太刀に出れば、女怪は例の奥の手、飛び込んで来てちくり八戒の脛を刺したからたまりません。あつと叫んで逃げ出したのを見て、悟空も同じく三十六計、またも散々の敗軍です。

さらでだに厚い八戒の脛は、毒のために腫れ上つて、まるで夜着の袖のやう。口を歪め涙をこぼして「痛いよう、痛いよう」と泣き苦しみますが、醫藥のない山中ではどうすることも出来ず、悟浄も悟空も途方にくれて互に顔を見合すばかり。

この時、おまつらへのやうに、観音菩薩が惠岸尊者と善財童子の兩人を連れて、空中の散歩に通りかかられた。悟空、素早く見つけて空に舞上り、譯を話してお助けを願ふと、一行の遭難に

はいたく同情されたが、さすがの観音様もどうも倒馬毒は苦手だとのお話。

「……しかし東天門の昂日星官に頼んだら何とかしてくれるぢやらう。一つ行つて見るがいい。」と仰せられて、金色の後光を放ち、南海に歸つて行かれました。

女怪の倒馬毒に敵しかねてゐた悟空は、観音様のお告げを聞いて心から喜びました。地上において二人に話して行く時間も惜しいので、雲の上から例の大聲。

「これから一走り昂日星官のところへ行つて頼んで来るから、我慢して待つてゐろよ。」

筋斗雲の最高速度を出して、またたく間に東天門に至り、星官に面會して出張を懇請すると、三蔵や悟空とは舊知の間柄ですから、早速引き受けて一緒に毒敵山にやつて来ました。八戒はまだ痛みが止らぬと見えてうんうん唸つてゐるのを、悟浄がうろろしながら介抱してゐます。

「おぉ天蓬元帥しばらくだつた。一體どうしたといふのだい。」

「星官君か、よく来てくれた。俺はこの山にゐる女賊に刺されて死ぬところだよ、ああ苦しい苦しい。」

「意氣地のないことをいひ給ふな、今俺がなほしてあげるよ。」

手で腫れ上つた脛を撫でつつ、ふうつと息を吹かけると、不思議や死ぬほどの痛みがけろり止つて、見る間に腫れも引いてしまふ。これを見た悟空も、ついでに消毒を頼みます。

「僕も昨夕頭をやられたんだが、今日は痒くてたまらん。一つ毒をとつてくれ給へな。」
星官は同じやうに撫でてすぐなほしてくれしたので、兩人とも大喜び。四人で作戦計畫を凝議した上、勇氣凜々として再び琵琶洞へと押しかける。

悟空と八戒が門を破つて洞内に亂入すると、女怪は怒つて立ち向つて来たから、二三合打ち合ふと見せて巧みに門外に誘ひ出した。この時星官一聲高く叫んで本相を現したのを見れば、世にも稀なる大きな雄鷄。羽ばたきをして女怪に躍りかかると、彼また本相に返つて、琵琶ほどもある大鷄と變る。所謂蛇蝎の蝎といふ恐ろしい毒蟲で、例の倒馬毒は尾の上の針で敵を刺すもの。しかし星官の鋭い嘴に對しては一たまりもなく突き殺されたので、かうなると強くなる八戒、死骸を粉微塵に踏み碎いて脣のかたきを取り、大いに溜飲を下げました。

一同は絶大なる感謝を以て、星官の歸るのを見送つた後、洞内にはいつて餘類を退治しようとする。女どもがうようよ出て来て頓首百拜致します。

「私どもは妖怪でも何でもありません。皆西梁女人國から渡はれて来て、腰元になつてゐた者で御座います。どうぞ御慈悲に命を助けて、國へ歸して下さいませ。」

悟空が検査してみると、その言の通り妖怪ではないやうだし、八戒はもとより婦人優遇論者だから一同を釋放してそれぞれ國に歸らせる。それから奥の間にはいつて三藏を救ひ出し、残つてゐた御馳走で、師弟打ち揃つて愉快な朝食をとつた後、一行はまた西に向けて旅立つた。

新遊記 西遊記 卷上



昭和二十四年三月十五日印刷
昭和二十四年三月二十日發行

定價 百九拾圓

著者 弓館小鶴

刊行者 伊藤藤一
東京都世田谷區北澤一ノ一七五

印刷者 石ヶ原常藏
東京都千代田區神田三崎町一ノ九
不二印刷株式會社

刊行所 株式會社 第一書房
東京都世田谷區北澤一ノ一七五
電話 世田谷三三二一、八番
編者 東京八九五七番

(製本 大光堂製本所 黒岩 晃)

~~24.5.17~~
24年 6月 6日 484

閏	閏	閏	閏	閏	閏	閏
			閏		閏	閏
	閏			閏	閏	閏
		閏				

閏覽濟

終

